180.21
I912a

体骨奉迎始末

180.21
I912o

序文

余は明治二十五年始めて暹羅に渡航し爾來日暹兩國間を往復する事已に十四回曩には暹羅老撾安南三國探檢を爲し歸來窃に企畫する處ろあり適ま佛骨奉迎準備の囑托を受け去る四月下旬渡暹聊か微力を其の間に效せしが幸に預想外の好結果を得たり玆に此の件に關する前後の始末を畧記し普く佛教徒に知らしめんとす而して書中載する處の材料は稻垣公使より教示せられしも多く其執筆の勞に到つては專ら大三輪氏の健腕によれり記して以て二氏の厚志を謝すと云爾

一

明治三十三年七月中浣西京三條橋畔
大津家樓上に於て

鐵脚　岩本生

佛骨奉迎始末

目次

第一　佛遺形
第二　發見
第三　聖物獻上
第四　暹羅奉迎
第五　サケット寺內高塔の模樣
第六　サケット寺內外之景況
第七　佛骨分配
第八　日本留學僧遠藤龍眠君
第九　岩本千綱君
第十　僧

国立国会
27.3.-4
図書館
261926

佛骨奉迎始末

岩本千綱
大三輪延彌合著

●信者　鳥渡伺ます、此度の御法會は眞に非常盛大な事でムりまして、私共七十の身で有り乍ら、斯樣に、何の御宗旨も何の御本山も打揃ふて、一處に御集會被遊樣な事蹟は、聞た事も見た事もムりませぬ、コレは一體何云譯な者でムりますかゑ

●僧　此は御遺形佛骨奉迎會と申して、吾等佛敎信徒の大先祖と仰ぎ奉る、釋迦牟尼如來樣の御遺形を御迎する爲の御法會で有る、抑も佛法が日本へ傳たは、人皇五十四代欽明天皇樣の御世で、今迄一千三百年程にも成る、長時間なれども、未斯な、大法會の有た例は有まい、足下達が幾等長壽自慢でも、追附た話ぢやない

●信者　道理で斯な空前事が出來ましたわへ、序に其入譯因緣を聞かして下されませナ

●僧　此話は中々長が、ソー突然に問はれても困る、なにお釋迦樣が先祖なら、お互は

二

子孫かと云のか、夫ともお釋迦樣は、元と佛法と云大ひ大家を御建て被成たお方樣で、其分家が天台眞言淨土法華や眞宗と成た、夫で奮を言ば、彼八家九宗はお釋迦樣と云御先祖が、丹精して拵へて呉れた財産を別て貰て出來た家で、其お祖師方は丁度分家の先祖で有て、皆同じ血脈で有るから元の元の其元は、色も變ぬ單た一人のお釋迦樣より外にやない、其大御先祖樣の御遺形のお舍利ぢやもの、各宗樣が一同に打揃て、

佛骨奉迎始末

お迎するに不思議は有まい

●信者　判りました、お釋迦樣が大御先祖ジヤから、御分家の各宗樣が打揃てのお迎は實に御尤で御坐ります、シタが其お舍利は一體ドー云譯で、何處から御迎申升かナ

●僧　尤の問ジヤ、其遺形は遠い異國の遏羅から御迎申すので、其入譯は中々一朝一夕の話ニヤできぬ

●信者　私共は是迄、御本山の御使僧樣や宿坊の住職抔から聽たには、お釋迦樣と申す佛樣は、昔中天竺の淨飯大王と云、天子樣の皇子に降誕なされて、悉達太子と呼び奉ツた御方樣ジヤが、末世の衆生が愚痴蒙昧にて、日々夜々に五逆十惡の大罪を造て、宿世の艮因を燒盡し、未來永劫浮瀨も無く、無間焦熱の苦界に落る事も打忘れて、浮雲の樣な事を宛にして無常の嵐に何時誘れて、愛婦の妻にも可愛の子にも死別れて、又も珍しからぬ地獄の古鄕に歸らニヤ成らぬ、哀れ墓なき樣を見るに見かねて、十九の年に一天萬乘の天子の御位をお捨て被成て、最愛の王妃にも至親の父王にも離別給ひて、御出家遊され十二ケ年の其間、伽羅、々阿羅、々の二人の仙人に御隨身遊されて、生たり死たりの難行苦行に憂身を痩させ玉ひ、遂に二月八日の曉の明星を御覽ずる時、茱出度成等正覺の御悟を開き給て、爾釋迦牟尼佛の如來位に御即被遊、始め鹿園の說法より終り涅槃の夕に至迄、四十餘年の其間三百餘會の大法會を設けて、五天竺中を彼地や此地やと衆生攝化に南船北馬一日の御休息も有らばこそ、御年積て八十歲の御高齡に御成り成され、跋提川の邊娑羅雙樹の間にて、遂に御涅槃にお入被遊たと承て居升が、ソンなら其御遺形は跋提川の邊に「シヤムロ」と云國が有て、夫から御迎申し

たので有り升か

僧　お前は能く御説教を記憶て居る感心ジャノー……、イヤ難有ムり升、併し御釋迦樣が御涅槃迄の事は、お前の申す處に大異はないが、偖愈御涅槃に御入り遊されてから、其御遺形は佛弟子達が、摩訶迦葉尊者を待合て、茶毘と申して御火葬を申上げた、處で、其跡に殘ッたがお舍利で有ッた、其お舍利をドーしたかと申すと、其時分の五天竺中の國王樣方が、四方から御集に成り各々に自分の國へ御持還に成て、寶塔と申して雲を突く樣な堂塔を拵へて、其中に御秘藏申した、處が今の遏羅と云國は矢張昔の東天竺の一國ジャと云説が有けれども、決して其跋提川の邊ではない、此は支那の西南の方に當る國で、前が遏羅灣と申す大海で、後が老撾の（古の羅越國）山國で、東が東蒲塞より交趾支那に連なり、西が馬來半島を越へて緬甸に達した國である、處が茲に日本人而も吾日本佛教徒の爲には、非常に大切な難有談がある、夫は何乎と申すと外でも無い、畏れ多くも吾平城天皇の皇子高岳宮樣が、藤原仲成の亂に無實の御

寃罪を御受け被成た事が有つて、皇太子の御位を御捨て成されて、眞言宗の祖師弘法大師の御弟子と成て、御出家遊され眞如法親王と申上げた、其法親王樣がどーも夫迄に日本へ來て居る佛法計りでは衆生濟度に物足らぬ氣がせられたと見へて、日本から迴るく支那へ渡て長年の間佛教の御研究を遊されたけれども、夫れでもどーも滿足が出來ぬ、其所で何でも是は支那でも臥目じや、一番天竺の根本地へ往て法を求めてやろうと云、大誓願を成されたが實に眞如法親王が八十有餘の御高齡の時で有ッた、處が其時分に天竺へ往くには流沙の沙漠を渡て葱嶺の嶮岨を越さねばならぬ事とて、其困難は固より今日から想像が出來ぬ、增して八十有餘の御老僧が從者も連れぬ一人旅である、一寸想ても身の毛が竪立た位で有る、處が此道中は途が嶮岨計りじやない、第一に猛獸毒蛇が居る第二に深山の惡氣がある、到底無事に通れる道でない、其所で親王樣じや今日の老撾昔の羅越國の山中へ差係た時、實にも哀れや痛しや、親王樣に

五

は吾等末世の凡夫を助け度計ッかりに、金枝玉葉の御身で有りながら、トウ〳〵老撾

の山中人氣絶へし深山にて、虎害の爲に御果て遊された、ソコは邏羅とは違へども、矢張同じ邏羅の領内で有から、我國の爲には實に容易ならぬ關係を保て居る事を覺へて、居なければならぬ、併し此話は中々長話じやから御緣を以て話しよふ、今日は序でに一寸申した迄とや

佛骨奉迎始末

信者　難有哀な御話を伺まして涙が溢れます、併し今日は重に佛骨の事を伺いトウムり升が、元來其お佛舍利は、日本の人が邏羅の國へ往て貰て來のを、何所かの御本山ゑでも上げたので有りますかナ

僧　ナンノナンノ、夫ナ輕々敷事ではない、此には段々込入た手續が有ッて、一應や二應で吾等がお迎する樣に成ッて日本へ渡たでは無い……、ナニ未だ夫も聽かせと申すのか、少々長くなるけれども序でに話すとしよふ、能く聞て家庭への土產にするが宜い、偖佛舍利の渡來は向の國は邏羅國で有と云事は覺へて居だろふ、處で其授主は誰ぞと云ば邏羅の天子樣で、其受者は大日本帝國の佛教信徒全體で有る、夫ジャから足下の云樣な、一個の宗旨や一個の本山へ下さッたジャ無い、其又入譯を申すに就て順序を立て云時は

佛骨奉迎始末

第一佛遺形　の出處ジャが、只今奉迎申す佛舍利は直接は邏羅から來ても、決して元來邏羅に在たのでは無い、是は今の印度國則ち天竺から來たのジャ、其天竺の中でバスティ洲と云が有て其中にバールトバアルと云處がある、其所にカピラバスタと申す處が有る、乙が釋迦牟尼如來の悉達太子が御誕生被成た處で、則ち父王の淨飯大王の城趾で有る、此所から十二英里往た處にピプラワと云古塔が有ッた、夫が乃ち此只今奉迎する御遺形の納つて在た塔で有る、ソシて其塔の高が二十一英尺で、下層から次第に上へ細小なッてゐる所謂圓錐形の塔で有る、其下層の直徑が百十六英尺で、周圍が三百四十八英尺有る、夫から中層八英尺の所の直徑が六十二英尺と云から、周圍が百六十八尺有る、夫から上は何で有つたか瞭分大した塔では無いか、處が其所はどー云場處かと云は、釋尊降誕地に程近き處で有て、ソーして斯いふ古塔が有とし見ると、

何か由緣の有り相な事は誰の考も同じ事で有る、處が二千年も此中に秘藏されて居た御遺形がドー云譯で現出たかと云ふと是が第二發見の因緣談になる、之は丁度孔子の遺書が古家の壁から出と同事である、此項英國人で其ピプラワ塔と共に、其邊の地所の權利を持て居る人が有た、其人はペッペと呼ぶ人で、其人の推察では此處は著明き釋迦牟尼如來の降誕地の近傍で有て、而も此塔が何の時代に出來たか知ぬ程の古建物で有から、之には何か佛敎史上に光彩を放つ程の材料が收ッて在に相違ないと、斯考へてから何時か之を發堀して見よと思て居と、其一念が增長して遂に西曆一千八百九十七年則吾明治三十年に始て發堀に從事した、すると其翌年の一月初旬に及んで工事が漸々進んで、頂上より十英尺の處迄遣て行と、始めて煉瓦製の筒管を認けた、尤も此塔は全體煉瓦造で有る、其管の中は粘土を以て塡充て有る、其管の直徑が本が一英尺も有て末口は四吋位に成ておる、此筒管は下の石棺の中心の位地を示した者だろと云ふ說が有る、夫を段々堀て十八英尺の

處迄往と、石棺を發見した、夫が棺の形で有て二行の文字が有る、（蓋の重量が一千五百三十七封ある）夫を除けて見と中に在た物が、件の御遺形の外に寶玉の種類廿個程で有ッた、左共其文字が今日の文字と違から一體何の事やら薩張判らぬ、ソコで有名なる梵學博士ホワイト氏に賴ンで研究して貰うと、コー云事に其文字が讀めた

本棺は釋迦牟尼如來の遺骨にして

其同胞サカヤに授く者なり（意譯）

參考　ドクトル、プーラー氏は此石棺蓋面二行の文字を左の如く譯せられたる由なれば參考迄に記載し置なり

此祥神靈ナル佛陀ノ遺形ハさかや（小男兒）族ニ分與セラレタル者ナリ（直譯）

其寶玉類は夫と同時に納た物に相違ないと云事が確定らるゝ樣に成ッた、また夫のみならず、此文字が、彼迦毘羅城に在る釋迦牟尼佛降誕地の紀念碑文字と同一類で有る事と成ッた、其所で此石棺中に納て在た骨（外に灰あり）は正しく世尊の御遺形にして、

を發見した、此紀念碑は佛滅後二百年後に於て阿育王の建設せしとの說あれば、兎に角

此塔は佛滅後餘り久からぬ者で、決して末代の建立でない事が判然する樣に成ッた、又當時の或る新聞には世尊入滅の時、カピラパスタのサカヤは佛の親戚として其遺骨を受けたと云事が、古書に在と書て有たソーな、夫はドーだか知らぬが日本の傳說では、僅に八ケ國の王に分與したと云事に成てゐる、所以で世尊の御寶家の迦毘羅城へ佛骨を迎へたは事實に相違ない、ソー見ると其近傍の聖地を撰んで納骨塔を建立したとは隨分信ぜらるゝ話で有る、夫れから其發見者ペツペ氏は夫を何したかと云と、流石は事理に明い英人程有ッて、最も可成公平な處置をした、之れが第三聖物獻上の一條で有る、偖ペツペ氏は此御遺形と灰と其他の寶玉類一切を悉皆纏めて、印度政府へ獻上して仕舞た、其主意と云者は斯る聖物は實に世界の貴重品にして、決して一人一個の私し得べき者でない、特に佛骨の如きは世界中に存在せる佛敎信徒が、悉く共に敬慕し尊重する最も神聖なる遺物である、蓋し佛陀の意志では、一切世界は吾家なり一切衆生は吾子なりと迄信じて居られた相なれば、三千年後の今

佛骨奉迎始末

日にして吾手に依頼して更らに塔内より現出せしは、正しく之が佛敎興隆の機運に當る者であろ、と云主意の考を起した者と見へて。兎に角自分の政府則ち印度政府へ獻上した、夫をする時にも自己の意志を述て置いた、夫れは矢張コー云ふ主意で有ッた相な、佛骨は佛敎信者の爲には正に各自の信仰を維持增上すべき神聖の物なれば、之を所持するは矢張佛敎信徒が適當で有ッて、若し他宗徒に對しても何の用にも立たぬ、ダカラ今獻上する佛骨は何卒一先遲羅王國の帝室に全分御寄贈に預り度し、而して其他の寶玉類は芙國ロンドン其他適當の博物館へ陳列し、汎く天下考古の材料に供して貰度と云事を申添へた、スルと印度政府は聖物と共に同氏の意見をも併せ採用して、夫々の處置に及んだが夫も中々公平の方法で有る、

先ヅ第一に御遺形の處分じや、夫は發見者の意見通に、彼等が佛敎の繼統者と認て居る遲羅王國の國王に御贈與申す事として、此旨を遲羅政府へ申込んだ、其時に印度政府からは御遺形分與の全權と共に之を遲羅國王に奉呈する事にした、サー其事が遲羅へ達

てから上下大騒に成つて、早速奉迎使を派遣せねばならぬと云處から、伯爵サクムと云人が國王の命を請けて勅使と爲て印度へ發向した、此が西暦一千八百九十九年則ち我明治三十二年の二月で有て御遺形を正しく受領したは其月十五日で有つた、第四遮羅奉迎の模様じや、偖ヒヤサクム勅使は森嚴なる儀式を以て印度政府より遺形の授受を了して芽出度遮羅國の領地なる馬來半島の新吳羅迄派遣して之をお迎へ申すと聞へると遮羅國王は同國海軍の軍艦を以て態々新吳羅迄派遣して之をお迎へ申すと云ふた實に御鄭重なる御取扱で有る、則ち其軍艦へ佛骨をお移し申して盤谷府の下流湄南河口を遡て漠南と稱處へ錨を下した、爰で二十日程御滯在遊されて盤谷府へお進に成り、兼て王室より御決定になりしサケット寺の寶塔の中へ御迎へ申し奉て大法會を執行したが。昨年五月二十三日を中心として前後三十餘日の間で有た、此間の願は非常なる者で何萬と云ふお僧達や何十萬と云ふ信者が一時に鐙轂の下へ四方から詰掛し事とて、流石に廣き盤谷の都も隅々裏々の端迄群集の道俗老幼男女滿々て、腕車や馬車の往來止に成たと申す事じや、夫等の景況は次に詳細話すとして、第五サケット寺内高塔の模様を雜ッと說話して聞く必要が有る、偖サケット寺は元と先帝の敕願所で有て、寺の境内の廣大な事は實に驚く許りで有る、其廣境内の中に六百三十棟の坊が有て、其裡には悉く僧侶が居る、其外見上る程の大堂が二ッ有る、大堂の有る境界の周圍が七百二十步程有て、全體の境内が横が七百步で縱が四百六十步有る、此の建物が皆煉瓦である處が此遮羅の盤谷の近傍は、四方廣漠たる原野の中に建られて有て、其近傍はツマリ湄南河の泥で造られた處と見へ、地質が全の粘土で小砂さへ無い位で有る、夫じやから石と謂たら藥にしやうとても無い、所以石材と言ば近く〳〵て五六十里先の海灣か、少し實の好石は是非支那から取らねばならぬ、處が此寺の境内は凡で切石で疊まれてある、コー云考で夫を見て觀ると實に大した工事である、如何にも天子の勅願所と云に耻ない、マタ夫計じやない外に可驚大工事がある、此は乃ち今お迎したお舍利を納めて置た高塔で有る、其塔は何云風の處に在かと云は、一の小山

の上に突立おる、ソンなら其山は昔から有かと云とソーでない、之れが人造であるシカも煉瓦とセメントで、疊み上げ塗り揚げた人造山で、其高さが十六丈餘も有て、螺旋形に成て昇る様にしてある、而して其山の周圍はと云ば、凡百六十三間位は乾度有るダロー、實に大したもので、皮肌から中心迄悉く煉瓦とセメントじやから驚くではない乎、處が又面白工夫をして有て其煉瓦の隙から、美麗な花の咲く大木が何百本となく竪に横に生出ておる、而して其木の下には奇花珍草が何時も咲て居ると云佳境で有て、其百花園の小山の山頂に雲を摩して突立ておるが、矢張煉瓦製の圓錐形の塔で其長が十丈已上も有る結局山と云者は盤谷中茲より外には無いダロー、ソシテ其塔の下を二丈五尺も切抜て、彼御遺形を納たのジャ、何と大した話ジャないか、コー云說話は幾ら仕ても盡ぬからヨイ加減にして、次に其サケット寺佛骨奉迎の役の概況を逑べよう。

●●●●●●●●●第六サケット寺内外之景況

扨愈御遺形を塔内に安置した當日と云者は、實に空前の

雜沓で有て流石の大院も群集の善男善女を入れ切ない、殊に出る者はなくて入る者計ジャ、夫じやから萬一混雜中に飛ンだ珍事を現出かも知れぬと云ふ處から、俄に門外の川へ仮橋を架けて順序に交替さして、僅に非常の怪我人の無い位で濟んだ、ソー云工合で有柄固より其遠來の參詣人が、盤谷の府中にハマル筈が無い、夫故身依頼りの無い連中は海山越へて來ながらも、枕も着けて寐事もならず多は路傍や人の軒下で、露宿したのが過半で有ッたと云事ジャ、茲に氣の毒な話は、盤谷在住の僧侶ジャ、元來暹羅の僧は日本の樣に寺内で飯を炊と云事は無い、皆每朝托鉢して信者の施物を貰て來て朝と晝と二度喫る計りで、晝から午後は固形物は一切口に入れぬと確定ッて居る、夫じやから是非朝の中に托鉢して二度の用意をせねばならぬ、處が今云樣に戶々家々裏屋迄遠來の客が詰掛て居ので、自家の客の擬待丈でも大變じやから、迚も托鉢のお僧迄にやお鉢が廻らぬ、平素なれば自分の食を減しても、托鉢僧には供養すれ共、今度はソーは往ぬソコで日本僧の遠藤龍眼サン抔は、此間は大に閉口して時々催餓目

に遇たとの事じやッた、一寸した樣な事なれ共、大樣が判るだろー、偖其等の信徒は那邊から來かと申すと、實に驚入束は支那の本部より安南東蒲塞をかけ、西は馬來緬甸より北は彼眞如法親王が終焉の老撾の山國から所謂千里を遠とせずして來た獻身的の信者計りで有る、中々我國の九州や北國位から西京へ來るとは違う、彼岩本君が遲羅から老撾の山中を通た時は、今日は死る乎明朝は斃れるか、晩になれば今夜は虎に咬れるかと覺悟し、朝に成ればヤレ嬉しや先助ッたと思ふ樣な事にて、活た心地が爲ぬ時が有ッたと云たが其樣ナ可恐山奥から爺サンヤ婆サンが、孫を連たり子を負たりして、此千歳一遇の盛典に驅付たとは、何と難有話じやないか。

●信者●　成程ソー承ッて見れば、實に難有やら恥やらで御坐ります、中々我々が五十里や百里サキから來たとて、夫を大儀に思チャ勿體ない、私等の國は北國で可なり遠國ですが、今の聖代の難有サニヤ貨幣さへ出せば寐て居て、チャンと御本山へ御禮が出來る、夫でも中々出にくい我家の門です、彼の國の人は實に感じ入た者でムり升な、ソシテ其跡はドーでムり升か。

●僧●　偖其佛骨はドー云風でサケット寺へ御入に成たかと申すと、先其御納器が黃金の寶塔で、而して夫を皇室御秘藏の牧料遲羅第一の大白象に御載せ申し、彼ピプラワ塔を發堀した時に使はれた人夫の印度人が二名御陪乘申し奉りて徐々御寺内へ御入に成ッた、時に群參の信者が喝采した音は、サケットの高塔も爲に震動したかと思はれた、中には念珠打振り或は飛揚り跳り上ッて、半は狂氣の樣に成て聲も惜まず大音上げて慟哭た、遠來の信者も有た相な其筈ジャ彼等は首に申た樣に、命から〳〵漸々此迄來ては、單た一度此佛の御遺形を拜たいが、精一杯で有たからだ。

而して其白象の前後には、遲羅國盤谷府在の海陸軍の兵隊が總出で護衛して來る、其又中央には王族や貴顯方が馬車や乘馬で扈從する、ソーすると夫れに接いて遲羅のお僧達が音樂に合せて和讃樣の節で梵唄を誦ふて來る、ソーか見ると安南其他の外國僧は之と同じ〳〵御經を誦へて來る、夫に續いて先の信者は老幼男女の嫌なく、

思ひ〳〵の國風の躍を踊て遣て來る、其樣が如何にも奇妙にて、アノ爺サンや婆サンがドーして、如斯動かれるかと思ふた相です、所詮彼等は丸で我を忘れて居るお經の中に歡喜踴躍と云事が有るがマー斯ナ事だろー、日本にも昔から盆踊と云ふ事が有て、何地でもヤル、彼は目連尊者の故事から出來事ジャ相ナ、夫は釋尊十大弟子の一人、神通第一の目連尊者が、始て六神通を得た時自分の母は何趣に生れて居だろと思て、ズーと觀見してみると思きや、吾大恩の母は今は正しく餓鬼道に墮して、飢饉飢渴の苦を受て居る事が、チャンと判た○其所で目連尊者が耐らぬ者じやから、釋尊の敎を請ふて母を助に往たが優蘭盆會の當日で有ッた、尊者の母は幸に我子の尊者に助られて、餓鬼道の苦を離れて天上界へ轉生した、其時には滿心の喜が形外に溢れて、尊者に手を曳れ乍ら、跳り踊て餓鬼道を出て來たと云事から、日本では優蘭盆會には踴をして亡者の供養に爲る樣に成た相ナ、今も夫と同意味で、彼遠來の信者等が、心一杯の嬉さが此樣な半狂の踴に成ッた者と見へる、其次には變幻自在の棒使の遲羅人の一隊が

くる、或は古代の音樂隊が來る抔、到底言にも筆にも盡ぬ景況で有ッた、其間寺の各處には各國の奏樂が有る、ソレで夜に爲と彼の塔の周國上下ツマり滿面には、日本製の大提燈幾百千となく點して、また其上に椰子樹油を何萬燈ともなく點したから、丸で前晉から拂曉迄、火光天を焦して居る、其壯觀は實に言語に絶して、アット驚倒する計りで有た相ナ。

●●●●●●第七佛骨分配　の事をお話すれば、之を分與て貰に來たは緬甸と錫蘭との二ヶ國で有る、此等の使節は勿論其國の佛敎徒を代表して來たには相違なきも、其實は政府から政府へ公然交涉した者で有る、ソコで遲羅政府は此使節を國賓としてのお取扱で、最も鄭重なる儀式を以て分與の盛典を御執行に成ッた、此時緬甸から持て來た奉迎用の入物は、悉皆黃金の地金に寶玉を以て莊嚴したもので、其價値が雜ッと參拾六萬圓の寶器で有た相な、又此時錫蘭から來た使節の中には、彼有名なるダンマパラ居士も居られたとの事である、

偖緬甸錫蘭は、昔からの佛教國で有て佛骨分配も不思議は無いが、茲に吾人が是非記憶せねばならぬ事は、彼露國人が御遺形を迎へた一條である、元來露西亞と云國は、耶蘇教中でも隨分頑僻なる希臘教を以て國教として居る國で有る、現に吾東京の駿河臺に天をも突拔く様な高塔が建てある、アレは希獵教のニコライ堂である、彼國が希臘教を擴張するには、國庫の財力を傾けても遣付る、一種特別の保護を以て居る宗派で有る、夫で露國々教は常に政府の前に立て其進路を開ひて居る、あのニコライ堂のニコライ僧正も、未だ日露條約の十分成立せぬ時分から、北海道へ來て居たのじや、夫位じやから彼内地は猶更ら其國教保護には中々綿密で有るダロー、反之實に不思議ではないか、其國教の下に在る露國民が、今回佛の御遺形を歡迎したとは、是はドー云事かと言と、此頃遲羅國王の王子でチャクラボンクセ親王と申す御方が、彼國に御遊學中で有て、丁度印度より佛骨奉迎の時分に御歸朝中で有ッた、ソコで親王が國王へ願て、其中を二個丈け頂戴して露國へ御持參に成ッた、スルと露國在來の四十名の

佛教信徒總代は非常に莊嚴なる儀式を以て、盛ンに歡待式を執行して露京のドコとかへ御勸請申したと云ふ事で有る、從來は異教國と計り想て居た露國民は吾日本大乘佛教國の先を制して佛骨の分配を受けたとは實に驚き入た話で有る、吾日本の佛徒も浮かりして居ると、千三百年已來吾國民を哺乳して來た佛教がドッコか露西亞當りへ轉宅してしまうかも知れぬ、そんな事は休題て稻垣公使で有る公使は前述來の樣を見聞（遲羅盤谷奉迎式の際は公使は御用歸朝中にて任地に在らず緬、錫分與の前日に當て歸任せる者也）してよりドーも傍觀して居る事が出來ぬソコで公使が種々心配する運に成た之が愈々吾日本が御遺形を奉迎する話の序開で有るが夫を談す迄に鳥渡此迄說話の始末を付けるなれば彼御遺形と共に發堀した寶玉類にて二種ある者は印度政府より更に發見人に下附する事となり其他の寶玉は二に分けて

其一分を　印度博物館に

其一分を　英國龍命博物館

に分置する事にした處で還羅國王より分配を受けて還た各國は其をドーしたかと云へば

緬甸は　マンデレーとラングーンの二ケ所に
錫蘭は　カンテリーとコロンボとアヌラダパラの三ケ所
露西亞は　某一ケ所

に安置する事と成た之は實に三千年前の釋迦牟尼如來が再生して衆生濟度の爲に各國へ分身したと同じ事で有る

處で回顧て日本を觀て見ると吾大日本は大小二乘の完備た大佛敎國で有にも關らず日本へ分配ると云事は印度政府も言ねば還羅政府も氣が附なかッたソコで吾帝國辨理公使の稻垣滿次郎君は之を見て大に殘念がつて還羅政府に向て日本佛敎にも亦た分配の榮を得させんとて一個人の資格を以て荐りに骨を折て心配せられた處が元此御遺形は緬甸と錫蘭とに分配と云事は兼て決定して居たけれども其他の用意は無つた其所へ臨

時に靈國へ分與たと來たから幾等日本からの相談でも實際分配る分が無いから話が中々面倒で有る然るに日還間の關係と言ふ者は單に無味淡泊の交際では濟ぬ夫ぢやから日本は還羅國に取ては容易ならぬ關係が有る其所で有から今此御遺形を日本に贈與と否とは將來兩國民の交際上非常の影響が有るソコへ氣の附たる達識活眼の還羅某貴顯は飽迄も稻垣公使に滿足を與へる樣な方法を取た之には段々込入た消息が有る、稻垣公使が此相談を繰めるには餘程念が入ッた、夫は斯云譯じや、初にも言た通此御遺形を印度政府から受取る時、還羅國王は分配の全權と共に受取たけれども、錫蘭緬甸は兼て兩政府間の內約が有たらしい、夫で有るから還羅の王室にも政府にも、日本が佛敎國で有ると云ふ事は百も千も承知して居ても、實際公然と日本へ照會して分配する程の分が無ッた、夫であるから稻垣公使の相談迄は還羅政府から何共云は無ッたらしい、尤も還羅王國を代表して居る駐日公使リチロング氏は此件に就いて日本佛敎信徒に賣任の有る勸誘を爲た事は岩本氏が始めて斯事に付て奔走した章を讀んだら判る、是等

の事情から裡面の消息を覗へば大に會得の出來る處が有る、ソコで稻垣公使じや、氏は遲羅政府が平素我國を東洋の先進國として敬し、同一敎國として親むに拘らず、今回の分配に付て何等の照會なきは、實際日本へ分配の分が有るものか將た無ものか、眞實有りもせぬ物を相談した處で、無理な話で相談のまとまる筈が無い、假令自分は帝國公使の資格を以てせぬにせよ、輕卒なることをして言耻掻てはならぬと云、愼重の態度を取られた處が前述の某貴顯の活達なる處置に依て圓滿なる結果を奏する事を知た、之を知た稻垣公使はモー大丈夫と思て左の書面を認めて外部大臣デバウオングセ親王へ贈て乙夜の覽に供へ奉るべき執達の事を申込んだ、スルと夫より五日目に至て外務大臣の親王は國王陛下の詔敕を禀けて稻垣公使の許へ御聽許の御返事が有つた、夫が實に優渥なる聖慮で有る。

左は稻垣公使が外務大臣に宛てたる書信と又た外務大臣が稻垣公使に宛てたる返書なり往復二書とも固より私信にして公文に非す今般吾稻垣公使及遲羅大臣の承諾

を經て玆に揭載する事とせり

書翰を以て啓上仕候今般印度政府より神聖なる釋尊の御遺形を遲國王陛下に贈呈致し候事誠に世界唯一の獨立佛敎國の元主に渡らせ玉ふ十善の仁王たる　陛下に對し其尊位の適合せる贈物と奉恐察候

陛下の宏德に渡らせられ候事は內外の等しく欽仰し奉る處にして今更呶々の要無之候去れば玆に印度政府より御受納ありし御遺形を更らに緬甸錫蘭の同敎徒に御分與有之候事殊更自他平等の聖德を發輝せられし事と奉存候

賢明なる殿下には夙に熟知も有るが如く我邦も亦古來の佛敎國にして現在の信徒三千餘萬之が敎導の僧侶亦七萬を超へ國內の宗派十二宗三十六派に分れ候而して我邦在來の佛敎は古來南方亞細亞の勢力ある佛敎の一派所謂南方佛敎に對して通稱北方佛敎なるものにして遲羅國其他南方亞細亞の諸佛敎國に對しては（勿論彼等の宗派をも含める）佛敎權輿の本土として認め居候

故に小生は此際聖物分與の恩典を我國民に與へ玉ふは日暹兩國民を一層親密なる一致に導き更らに同一種族同一宗教同一語原の同情緊切ならしめ以て向來益兩國の紐帶たらしむるには實に無上の好機會に逢遇せる事と信ずる者に候

小生は後來屢々　陛下に咫尺し奉るの榮を得て　陛下の寛仁慈愛の宏德を保たせられ玉ふ事を熟知候得者茲に敢て不遜を顧みず　陛下の聖德に鑒み謹で我邦多數の佛教徒をして聖物の分與を得て　陛下の臣民及他友邦佛徒と同じく十善帝王の德澤に浴せしめん事を希望する者に候公愛慈仁なる　陛下は必ず之を納れさせ玉ふ事に於て毫末も顧慮を要せざる事を確信する者に候叡聖文武に渡らせ玉ふ暹羅國王陛下は日本及各佛教國の信徒が世界帝王中の唯一なる佛教外護の帝王として瞻仰し奉る處に候得ば今此仁王の親しく聖物分與を賜らんか日暹兩國民をして同一教法より同一種族たるの感を一層昂からしめると同時に　陛下仁慈の聖擧が兩國民を接近して益々親密ならしむるに無限の勢力ある事は聰明なる殿下に向て小生敢て呶々を要せざる次第に候

小生が微衷幸に　陛下の御嘉納を得ば更に本國より御遺形奉迎の爲め來暹すべき委員之儀に付ては可成日本總佛教徒を完全に代表すべき者たらしむる事は小生微力を惜さるべく又た御遺形保存の場處及方法如何に關しては各宗の派代表者に一任すべきものと存候得共小生物に舊都平安城は今日尚佛教各宗派の淵叢地たるを以て多分同地を撰定可致事と存候左樣相成候節は之を贈與し玉へる大施主たる　陛下の尊位も聖物の威靈に對して相當なる方法を以て永遠に保存すべきは信じて疑はさる處に候　殿下幸に此拙書を　陛下の叡覽に供へ奉り睿慮の在る處を御都合次第御通知被下候へば幸甚此事に御座候敬具

千九百年一月二十七日

日本帝國公使館

稻垣滿次郎

デバウオングセ親王殿下

拝復　陳者一月二十七日附尊翰の御遣形を日本佛教徒に賜與の事を我國王陛下に奏の儀に關する尊書を天覽に供する榮を得るの欣喜を傳申候我陛下元より日本皇帝陛下の保有し給ふ尊位を御熟知あらせられ且つ貴下御詳悉の事實充分御認得の上陛下は貴下の高見を納れさせ給ひ且つ聖物受取の爲め日本より派遣の委員は喜んで受けさせ給ふべき事を貴下に報ずべき事を小生に敕命に有之候

尚又陛下には右聖物は國家より國家に對する贈物にして特に或宗派に贈る者に無之旨に乞を以て兩國親交上一致の紐帶たらん事を御希望あらせらるゝ旨貴下に報ずべき事をも併せて小生に敕命有之候敬具

千九百年二月一日

外務省

デヴアウォングセ

稻垣滿次郎殿

佛骨奉迎始末

夫で有るから、今度の法會は中々容易な仕事ではない、所謂國と國との關係で有る、尤も稻垣公使は公使の資格で仕たでは無い、前云通り一個人の稻垣滿次郎で仕た、夫故稻垣公使は人知れぬ苦辛をした事は容易でない、何故なれば第一遲羅政府抔の考では、斯云大事件は迚も政府が關係せずして出來る者でない、又た關係せねばならぬ事柄である、現に錫蘭、緬甸の二國は遲羅外務大臣と英國代理公使の間に公文の往復が有ッた、夫れに反して日本に限り、公使が立派な資格を棚へ上げて、個人と爲ての相談とは合點が行かぬ位の考は、自國遲羅の政度風俗に推當て考へて居たに相違ない、其國風政度の差異が漸〳〵判つても、未だ斯る大事業は單に國民丈の力では六ヶ敷かろ位の想像は有たらしい、若し夫れでなくて遲國政府が早より我國民、殊に佛教信徒の力は或方面に向ては、政府の力を借らすとも否政府も及ばぬ位の事を遣付る事の出來る事情を曉て居たなら、餘程稻垣公使の運動も荷が輕かッたに相違ない、ソー云事で有るから一日も早〳〵日本から奉迎に行〳〵か、但は奉迎をするとか云雜報でも得ない中は、稻

佛骨奉迎始末

垣公使はマダ〳〵心配は消ぬ、夫を日本に居て稲垣公使の通知を得ると同時に、其所へ注意て人に卒先して奮發したが、眞宗大谷派の參務石川舜台師であろう。

佛骨奉迎始末

第八日本留學僧遠藤龍眠君の運動を話さにやならぬ、此人は此迄にもチヨッチヨと話の引合に出た人ジャが、ドー云人かと云と本曹洞宗のお僧で嶽岡松巖和尙のお弟子で有て、去卅一年始て還羅へ來てから、直樣還羅僧と化つて日々跣足で肩脫で、頭顱を熱帶國の炎天に照らして托鉢なされて還羅佛教を研究してムる勇猛精進の御修行僧で有る、處が稲垣公使が御遣形分配の敕許を得た時、遠藤君は何んでも稲垣公使を手傳て、ドーでもコーでも一日も早く日本から奉迎使が來る樣にせねばならぬと云ので、色々と心配をしたけれども、悲哉此お方は御修行僧の事とてお錢の寸覺が就かぬ、一體此還羅は日本と違い、葉書一枚四錢切手一枚十二錢と云鹽梅であるから、此事を日本へ通知するにしても、一本や二本の事ならドーでも成るが、さて何十本と云封書を出すには、托鉢して生活をして御座る御修行僧にはチト困難である、處が難有事には隨分

篤志家も有ものにて、遠藤君の素行に感じて居た人が有ッて、此度の事は郵便貿は申すも愚か、蒟蒻版迄拵らへて遠藤君の書た、檄文を夜の目も寐ずに摺上げて、其翌日の汽船便の間に合ふ樣に切手迄貼て呉れたが、日還商會の上野貞利君で有る、遠藤君は之に力を得て日本へ出した檄文の數が百本已上で、之が各新聞雜誌社或は其他各宗本山又は各宗學校へ着て見ると、稲垣公使の通告書と兩々相對して、日本國民に御遣形奉迎の事を勸告する樣に成た、此檄文を日本へ發したは本年二月十日で有て、ソレで稲垣公使の通告書が左の通りで有る

佛骨奉迎始末

各位倍々御淸適爲邦家奉大賀候

小生熟ら世界宗敎界の大勢を察するに佛、回、基所謂世界三大宗敎の中に就て佛敎は前後兩印度より支那日本に亘りて尙數億萬の信徒を擁す若し夫れ一朝好機の乘すべきあり此等南北兩佛敎の一致を計り數億萬の信徒擬つて一塊石の如くならば其勢力や眞に計るべからざるものあり佛敎是に至て世界に雄飛し得べく〳〵佛敎如斯にして二

十世紀文化の上に一大光明を發揮すべし佛敎徒の天職亦實に之に存する事と信候誠に之を小にしては日本佛敎徒を打つて一丸となし大にしては世界佛敎徒の一致を計り茲に佛界の一新時期を劃し暗中の大飛躍を試むる事今日佛敎界の急務にして諸氏等先達の責任亦是にあることゝ信候

而かくして小生は今諸氏と共に佛敎一新の好機到來したるを祝せんと欲するものに御座候夫は諸氏も御承知の如く昨春英領印度政府は同國ヒルラハラに於てペッペ氏の發見したる釋尊の遺骨及遺灰其他の遺物（遺物發見の記事別紙御參照相成度候）をば佛敎唯一の獨立國たる當國王陛下に贈呈し當國王陛下亦空前の盛式を以て之を迎へ給ひしが陛下には右聖物を各佛敎國に頒ち世界佛敎徒の一致を計らんとするの御聖旨あり而して今一月には錫倫島及緬甸の兩地より委員派遣し盛大なる儀式を以て各々聖物の頒を得申候然るに這回當國王陛下亦右聖物の一部を我國佛敎界に贈るの聖旨あり小生の指して以て佛界一新の好機となすは卽ち此事に御座候

佛骨奉迎始末

抑も聖遺聖物なるものは如何に敎徒の熱信を昂め渴仰を加ふるかは今更喋々を要せざる處に候彼の露國莫斯科府の「カセドラル、オフ、アッサンプション」に於ける黃金龕中基督 刑の古釘が常に巡拜の善男善女をして隨喜の淚を墮さしむるが如き或はクリミヤの大戰亦其遠因を聖地ゼルサレムの事に發し或は獨帝ゼルサレムに巡拜し給ひしが如き所謂聖地聖物なるものゝ如何に歐米基督敎國の民に渴仰せられつゝあるかを推知するに難からず候

這回の事實に佛敎界空前の盛事たり諸氏宜しく此好機に乘じて南北佛敎の一致を計り以て世界佛敎徒の惰眠に鞭ち佛界一振の盛擧に出でられんと熱望に不堪候

當國王陛下が我國佛敎界に對し聖物御贈與の聖旨に出でられたると既に當國外務大臣より通知有之且つ我邦よりの派遣委員に對しては謁見等の御厚待をも賜はるべき旨是れ亦外務大臣の通知に接し申候但し陛下の聖旨特に之を或る一宗派に贈るにあらずして我邦佛敎徒全體に賜ふものに御座候

右の次第に候得者我邦佛教各派の中より可成高徳博學にして英語を能くする仁數名を委員に御撰び相成至急御派遣相成度候敬具

明治三十三年二月十二日

在暹羅國盤谷府日本帝國公使館

稻垣滿次郎

各派管長宛

佛教奉迎に付大日本帝國愛國護法の士に稟告す

凡そ物の隆盛を謀らんと欲せば協同一致に依らさる可からす而して協同一致の本は合意合働にあり換言すれば異體同心協力分路是なり此事や發し難くして守り難きとは往古來今識者の共に難關とする處なり、按するに我國は十三宗三十一派四十一人の管長三千七十九萬四千八百九十七人の信徒を有し南北を通じ佛教中進歩の點勢力の點都てに於て第一位にあるとは自らも許し他も亦認識する處なり既に其名ありと

すれば其實無かる可からす名は實の賓たり實無ふして名のみ存するの理やあらん實とは何ぞ曰く南北五億の佛徒に通じ打て一團と爲し脉絡相通じ緩急相助け共に進んでは法田を開拓し佛種子を植へ止んでは甘露微妙の法雨を降らし進では法味の聖固を守り睾々乎として止むなくんば遂には五大洲を通じて我法味に飽滿せしむる時あらん是大聖釋尊の本懐にして歷代佛祖の粉骨碎身し玉ふ處法乳の慈恩に浴澤するもの奈何でか是れを等閑に付す可けんや夫れ我日本帝國の昨今は日本の日本にあらずして世界の日本東洋の盟主たり然らば我徒は日本佛徒に非ずして世界の佛徒南北佛徒の主動者たらさる可らず既に任重く事大なり豈内地の事にのみ齷齪とするの時ならんや内地の經營と共に海外異邦の地に向て精神界の同盟軍を起し外教徒の邦域に進入し作戰線を施設せさる可らす天なる哉命なる哉茲に一大快事こそ生じたり何なや曰く佛骨奉迎之件是なり抑も當佛骨は西曆千八百九十七年英人ヒップなる者のカピラスバストより距る二三哩ヒプテハーの地に發見せり當てヒップ思へらく此地

は釋尊の遺骨を奉葬せるが敢て必ずや古代の器物ある可きを信じ其の古塔を穿つこと二十尺餘に及べり果せる哉一大石窟あり其内より遺骨及び寶石等數種を出だす其内水晶に文字を彫刻せる者あり是をドクトルホイなる人の手に飜譯せらる曰く佛滅後其遺族へ分與せらるゝ云々の事閧記せり是に依てヒップは如此寶物を私寶と爲すを惜み都て英政府へ奉納し且つ上奏して曰く是を四分し一分は印度カルカッタの博物館に納め一分は英政府へ納め一分は發掘者に分與せられ而して佛骨に屬する部分は當時佛敎國たる遲羅王國へ贈呈せられ度き旨を以てす英政府は同人の希望に一任す是れに由て昨年春遲國政府は勅使を遣く印度に派し奉迎して前後三十餘日の大祭を執行し全國の道俗千里を遠とせずして盤谷王都に來集す當時の形境は實て我同胞に報せしを以て今茲に略す

本年一月緬甸錫蘭の佛徒道俗三十餘人來遲し佛骨分與を受け在留二十餘日にして歸途に登れり

茲に於て我日本公使稻垣滿次郎氏は遲國皇帝へ上奏して曰く

我日本帝國は佛敎渡來後茲に千有餘年上　王皇より下庶人に至る迄佛陀大悲の慈恩に薰習せざるなく其敎義發達の點に至ては南北佛敎中一大高位にあるや世界各國の許す處にして上下一致同奉の佛敎國たるに依り冀くは同佛敎國の好を以て分與おらば我同胞の大幸何ぞ是れに過んと奏問數回遂に今回王命を以て分與の確報を得たり是偏に公使の周旋多きに依ると雖とも亦我神洲の國威と我佛敎界の實力偉大なるの然らしむる處たるや明なり然らば我日本佛敎徒の任や重く實や大なるとは增々明らん　遲國皇帝の勅命は日本佛敎徒一部に分與するにおらずして佛敎全般へ分與せらるゝものなるが故に日本佛敎徒は一致協同し宗の內外を問はず各々其信徒を誘ひ尤も偉大なる奉迎式を擧げざる可からず此事や前來陳ぶる處の內國佛徒合同一團の導火線にして世界全佛敎徒同盟の嚆矢たり

翻て社界の大勢を察するに協和同盟の聲は日に々々新たに從て一國の政黨なるもの

も小黨分裂の時代は去て一大政黨と變じ其他新聞に雜誌に然らざるはなし世運の流潮既に然り我黨亦舊時の面目に安住して可ならんや又我國佛敎徒は暹羅王室より幾多の厚意を受けつゝあり初めには暹羅の一大藏經を我國各宗本山に奉納せらる其後二三の僧侶此地に止るあり今又佛骨の分與を受くることを得る此厚意に對し我日本佛敎徒は大に酬ひざるを得ざる義務を有せり特に今日の如きは南北佛敎徒中最大一位にありと常に自負せるを愧ぢざるの實を擧げざる可らず將來人智の發達と共に各自分業を主とし或は我錫蘭に入りサンスクリットを學習するもの或は暹羅に來りバリーを學ぶもの年を追ふて增々多からん或は更に今度暹羅の佛徒にして日本に至り日本佛敎の如何を探究するものも生ぜん是將來の想像にあらずして現今其緒に付きつゝあり何れの點よりするも今回の件は彼我同盟の第一着步として逸す可からざる好機會たり如此き機會に乘じ若し將來暹羅を南北佛敎の中央府と爲し一方には緬甸錫蘭に入り一方にはカンボチヤ安南老撾西藏カシユミル、フータン、クシヒムより

更にカシユミル、フータン、クシセムより更に轉じて南方支那の一帶に及び北方は日本を本部となし蒙古朝鮮より支那本部に入り氣脉相通じ朝にはヒマラヤの山頭に雲を起し夕には蒙古の沙原に雨を降らすに至らば豈亦一大事ならずや　不肖遠藤龍眠謹で大日本帝國愛國護法の士に稟告す

明治三十三年二月

在暹羅王國盤谷府

勅願所　ワットサケット

遠藤龍眠

第九岩本千綱君　ぢやが、前のは暹羅のお話で、まだ稻垣公使と遠藤龍眠氏との通知が日本へ來ない迄に、內地に居て早く此事を知て運動を始めた人がある、之が今度の佛骨奉迎準備員岩本千綱君である。夫は何云ふ事かと云ふに、本年二月二十二日の夕方に暹羅公使館付通譯官山本安太郎氏より、急便の手紙が岩本君の處へ着たから披

て見ると中には暹羅公使が急々面會したい事があるから直ぐ來て呉れと云ふ文面であ
る、そこで、翌二十三日早朝に東京麻布 霞 町の暹羅公使館へ參つて、山本通譯官と
共に駐日公使伯爵リチロング氏に面會して急件の趣を聞て見ると、要件は他ではな
かつた、則ち本國暹羅の佛骨騒の一件であつた。

佛骨奉迎始末

此岩本君は、兼て暹羅とは深い關係を以て居る人故、公使のリチロング伯とは頗る親密
の間柄であるから、時々喚れて種々の相談をせらるゝ、處が今日の話は直に御遣形の事
に來た、そこで公使が申さるゝには、這回印度に於て容易ならぬ、古寶聖物と發見し
た者がある、夫が二千年前の釋迦牟尼如來の遺骨と、之と一處に在た寶玉類である、其
中の佛骨に限り我皇帝を以て佛敎の繼統者と認て、印度政府より我政府へ御贈與に成
た、處で吾國の政府は我國民と共に之を奉迎して、更に之を他の友邦佛敎國に分與する
事に成た現に緬、蘭の二國よりは、政府と政府との間に交渉の出來てから、彼國より國
使を派して此分配に預ると云ふ騒ぎで、其評判實況は容易ならぬ樣子とや、已に支那佛

敎徒よりも之が分配を申込んだと云ふ事もうすゝ傳はつて來た位である、然に貴邦
日本は實に大小二乘完備の國であつて、而して東洋第一の同敎友邦國である、そして文化の程度から見ても東洋先進
みならず、殊に東洋第一の同敎友邦國である、そして文化の程度から見ても東洋先進
國であつて、大陸碁布の列國を率連れて、東洋金種の大經綸の衝に當らねばならぬ、大
任を負て居る貴國である、貴國民が此義俠なる大抱負を實行するには、是非此唇齒輔車
の友邦民が疎緣では仕方がないから、互に親交を温めねばならぬと思ふ、夫を爲るには
何か大機會が無くては千里隔絶の國民を接近さする事は出來ぬ、丁度從來自尊を主張
して、敢て貴國の文明を知らざりし支那國民の如も、先年の日淸戰爭が大機會と成つ
て、今日は却て戰爭に負けた憾をも打忘れて貴國を慕ふ樣に成つて來た、之は逆の機
會である、今貴國民が支那以南に向て、東洋先進國の大任を盡さんとする時は、尤も
弊國が必要と考へる、夫故に頃日相互の使臣が派遣せらるゝ樣の、條約國と成つた次
第である、故に今日は公然の友邦である、否兄弟國である、貴國は我國民を開導し

て、共に東洋の平和を維持すべき大責任のある國民である、然れども日遐交通の日淺くして、未だ深緣の結ばれざる時に際し、忽然兩國民の信仰を支配する、最も神聖にして最も有力なる、佛骨事件の現出せし如きは、實に非常なる最好機會であつて、寧ろ天幸と云べし、則ち順の機會を天から與へられたる者じやと思ふ、夫じやから今三千萬已上の信徒を有せる貴邦大佛教國民が佛骨分配を弊國へ申込は至當である、我國も此の貴國民の申込を歡迎するは正當の禮儀である、之を今日迄打棄置たは互の等閑であると考へる、然ば幸にして貴國民、則ち大佛教國民にして此の申込を爲す如きあれば、余は飽迄も之に盡瘁して、貴國佛教徒に滿足なる結果を與るに力むるを嘗ふものじや、足下幸に我意を諒して此の好機會を逸する勿れとの說であつた、そこで積年日遐事業に腦髓を惱しつゝある岩本君は、實に天にも昇る樣な思ひをして、直に了承の旨を告げて公使館を飛び出して、兼て知人なる眞宗大谷派參務石川舜台師を、芝區三田小山町の寓に尋ねて、之に相談しようと思て車で馳付たれども、石川師は早や

西京へ歸た跡で同師に直接の話をする事が出來なかつた、けれ共幸に野間凌空と云ふ同じ大谷派の役員に面會して、此話を仕た處が野間氏も大恐悅で一も二もなく贊成をして、西京に歸て石川師に斷す事を約束し又た岩本君は別に手紙を以て此事を同師に申送つて、是非大谷派が首唱者となり好し一派の全力を擧てまでも、此の御遺形奉迎は至急斷行する樣に盡力する事を勸告した、之が日本に於て御遺形奉迎の事を申出した濫觴にて、それが二月二十二日である。

●●信者　只今御廟の中に其のリチロングとか云ふ高貴人の話はどよも六ケ敷くて判りませんもつと易解話には出來させぬか。

●僧　夫は物の順序と云ふものじやから仕方がない、夫から二月五日と成つた處で、岩本君は石川師に直話せねば迚ても事の運びが後れるからと思つて、西京へ參て同師に面會じて段を本件に付き相談して見ると、石川師は是れより先きに野間氏より岩本君が話した、彼の遲羅公使忠告の傳言を承知せしのみならず、五六日後れて稻垣公使の

書面も到來し新聞紙にもぼつ〳〵出だした、そこで石川師は佛骨奉迎の事を夫々本山の役員とも協議し法主にも申上げた處で法生もひどくお喜びなされたそうな夫ゆゑ之を三月三日の各宗管長會議に提出した處で、此時には漸く稻垣公使及び遠藤留學僧の通知書が內地へ到來した時分の事で、各宗管長は申迄もなく、其他の人も石川參務の紹介を待つ迄もなく承知して居たので、一同之を贊成して奉迎の大體に付ては毫も遺存はなかつた、併し此事は中々重大の件にて費用の點から見ても容易な事でない、殊に之が昔し有た留學僧が、支那や朝鮮から經典や佛像などを取て歸つたとは非常なる相違にて、授主は還羅と云ふ一國の大王で、其世話人は大日本國を代表して居る公使である、吾國から貰ひに行く〳〵受者は一個の何宗とか何派とか何寺何本山と云ふでなく、太日本帝國の佛敎徒である、仮令我國よりは政府の關係なきにせよ、實は空前の大盛事にて、國と國との關係であるから滅多な事をしては、兩國交際に大關係を及ぼす、又た第一直接迷惑するのは稻垣公使であるそこで流石は各宗管長樣程ありて、此處へ考が及んだと見へ、前申す通り此事柄は至極結構な難有ひ事なれども其奉迎の方法等は粗忽のない樣に、來る五月の管長會議で充分に打合をして夫から奉迎使を派遣する事にしようと、いふ話しに落着したのだ、處が其日の會議は御遺形奉迎の事で開たのでなく、他に段々必要なる議案があつたので御遺形の事は先づ夫れ成になつて仕舞たのじや。

●●信者　はゝ夫れじや何んで御坐りますか、和尙樣は最前釋迦牟尼如來は我々の親である大先祖である、夫故今度遲羅の王樣が佛骨を下さると云ふのは、丁度親の骨を分けて下さると一般じやと仰せられた樣に聞きましたが、夫に今承はれば此の大事の御相談を管長會議とか申す御會議の序手に成され、まだ其上に後の決議の御話は、中六十日もさきへ延期する計でなくて、矢張御會議の序手にすると決議したのでありますか。

●●僧　さあ其處じや、御前達やそんな邪推をしては困る、何んの〳〵人天の大導師におはします一宗の管長樣の御相談に、そんな浮薄な御話しがあろふか、そこには段々譯

がある事にて、第一事柄が空前の大盛事であるから、大事を踏んだのだ併しお前達の不審も一理ある事である、全体東本願寺の方々は彼の各宗管長の御賛成を得た以上は、自分の方が發議者と云ふ義務があるから進んで奉迎の準備に取掛つたのじや、大谷派の考では知らぬ迄は是非がないが斯く知つた以上しかも、一は暹羅國の全權公使一は我國の辨理公使が申込んだる事を少しの都合位ひで早速御受せぬとはどうも暹羅國の國王にも兩國の公使にも相濟まぬ、殊に本山と云ふ責任からしては衆多の信者に相濟まぬ、三世諸佛に分疏の仕様がないと云ふので、兎に角御遺形奉迎の事に就ては各管長方にも異存のない様子なれば、御奉迎の準備に取係るべし、夫らの費用抔は幾干要るとも一時東本願寺にて取替る事とし、奉迎の使節も都合によれば此方より派出しても宜しとして、其準備員には是迄暹羅事情に最も精通き、且つ本件の話を始めて聞出した初頭の紹介人と云ふ、大關係のある岩本君を頼んで、使節より先に出發さして萬事稻垣公使と協議して、奉迎の準備を爲る事になつて、正しく岩本君が此重任を帶び

兼て同行を約し置たる、佛教の事には多少經驗ある大三輪延彌と云ふ人を伴ひ、我神戸港を出帆したのが三月二十八日の夜であつた。

信者　そんなら其岩本と云ふ人が準備員として渡暹してから、どういふ事を致しましたか。

僧　岩本君は三月二十八日神戸を出てから、香港と云ふ處にて船に乘り替へ、全体は十八九日にて行く處なれ共、海上の都合で漸く其翌月則ち四月廿三日に暹羅國盤谷府へ上陸し、早速稻垣公使を尋た處が、丁度此時公使には避暑の爲め、安賓と云ふ海濱へ往た跡であつたから、其日は仕方なく、其翌廿四日一艘の小蒸汽船を借りて公使を安賓の寓居に訪て種々の打合をして段々と其準備に着手した。

●●●第十僧　偖之からがいよ〳〵奉迎使の話じや岩本君が出發した時には東本願寺の見込では四月十五日頃迄には諸事取極め佛骨奉迎使も日本を出發する積りであつたが其後京都で十二宗三十六派の委員達が度々會合せられ評議の結果彌々日本佛教各宗連合

して御遺形を御迎へ申す事となり正使には大谷派本願寺の御門跡大谷光演師を撰び其他西本願寺の藤島了穩臨濟宗妙心寺派の前田誠節曹洞宗日置默仙の三師を使節となし隨行員には東本願寺の南條博士。石川舜臺大草慧實師を始め其他藤島前田日置師等の隨行員もあり總勢十八名にて神戸港を解纜したが丁度五月廿三日で岩本君の出發より五十七日めであつた夫から一行は香港新嘉坡を經て海上無恙暹羅國盤谷府へ着したが六月十二日の朝九時前であつた偖て之から其時の景況と使節滯在中の樣子と御遺形受取りの手續とをざつと話す事としよふ

六月八日新嘉坡出での電報が翌九日の正午頃稻垣公使の手許へ着してから日取りを繰て見ると丁度十二の朝盤谷着の事となる其處で岩本君は後事を大三輪始め其他の有志者に托せて自身は十一日午後の汽車で湄南河口の漠南まで出掛けた之は一行を出迎ひかた〳〵着暹後の打合せの爲であつた處が漠南に着するや否氣ては明朝の入船と思て居た一行便乘の新嘉坡號が突然黒烟を吐て入港して來たので岩本君は早速其船に乘り込んで一行を迎へ正使始め皆々の健康を祝したけれ共此船は折惡敷西洋へ留學して御坐た暹羅國の皇族の御歸國と同船の事とて上等室の好き處は大概彼等が取り切て居られた爲め吾が一行は非常に難義をして正使の大谷光演師でさへ極々熱ひ汚ひ臭のする窮屈な室内へ這入て御坐つたと云ふ事じや全體盤谷通の船は日本や西洋とは違ひ船が不潔で御負に熱帶地と來て居るがら五六日間航海の辛抱は中々容易でないつまり日本に居る御前方には想像の出來ぬ位である夫を見た岩本君は思はず暗涙が流れたそふな又た大谷新法主は此度の御旅行にて祖師上人や其他三國傳燈の高僧方の辛酸苦勞を思ひ遣られて一入祖恩の浩大を覺られたに相違ない幾ら窮屈でも幾ら熱ても今日は堅牢なる蒸汽の鐵船で行〳〵仕事じやケ樣な船の破壞する事は滅多にない然るに昔の玄奘三藏や我朝の眞如法親王の如き御方は流沙葱嶺の高山峻峰を加かも猛獸毒蛇や蠻烟瘴癘と戰ひつゝ御通りなされ遥羅位ひの近き處でなくて遠き印度まで歩行て、御出でになりしを思へば今度御迎へ申す釋迦牟尼如來は勿論各宗派の御祖師方や御開山などの御高

恩が眞實難有くなる又た御門跡始め各宗の御使節が此度圖らずも此樣な御苦勞を爲された御影で之からのち〳〵の御化導も愈々難有なるに相違ない

●●信者　分りました只だ御話を聞た計りでも涙がこぼれます夫から其跡はどふなりましたか

●僧　話しが横途へ這入たが岩本君が本船に移つてから直ぐ今回一行の通譯係たる彼の遞羅公使館附の山本安太郎氏は上陸して帝國公使館と遞羅の文部省と在留日本人とに急報したすると何れも上陸は明日午後と思て居た事とて一同大狼狽に狼狽し徹夜して準備に取り係り旅館は最初から巴里ホテルと極めて居たけれ共稻垣滿次郎君が一個人資格にて大谷正使だけは帝國貴族として賓客の禮を以て公使館へ御宿申す事に相談が出來たなれ共兎に角一行は一先づ巴里ホテルに着せらるゝ筈であつた偖て當時の景況はと云ば先づ一番に本船へ向け遞羅政府より一隻の小蒸汽船を歡迎の爲め御廻しになつた之れには文部書記官パクデイ男爵同秘書官ヒローム氏等が乘込んで居る其次には

26192

稻垣公使より出されたる船にて之には時田書記生內藤警部乘込んで居る其他兼ては三艘の小蒸汽船にて在留日本人が歡迎する手筈でなかつたが之は時間の行き違ひで間に合はなかつた使節一行が湄南河を溯つてバンモー棧橋に着たは十二日の午前八時三十分にて時に兼て設け置きたる烟火が轟然と沖天に破裂して帝國の日章旗と遞羅の白象旗とが飜々として青空に跳て一行を迎へたは頗る愉快であつた夫から一行は馬車にて巴里ホテルに向ふ其道筋にある日本雜貨店協亞商會や野崎洋行は軒頭に日遞兩國の國旗を掲げて祝意を表したホテルへ着て見ると此處には兩國々旗入の球燈が二大樓の大樓廊より山形なりに飾付けられ入口には兩國の大國旗が交叉されてあり其有樣はなんとなく外國と思へぬ感じがして人目を驚す計りの盛大であつて又樓上には歡迎人に對し新門跡始め使節方より鄭重なる挨拶があつて聽て朝饗が濟むと大谷正使と南條博士は公使館より差廻されたる二頭立の馬車へ時田書記生同乘して公使館へ移られ他の三使節は都合上東洋ホテルに止宿し大谷派の隨行員のみは巴里ホテルに止宿し一行の滯

留八日間遲羅政府より之に對する御待遇は實に鄭重極まるもので丸で國賓同樣であつた其振合は丁度今春彼の有名なる獨逸皇弟ヘンリー親王の御來遊の時と殆んど同一であつたと申す事じや尤も箇樣に遲羅政府より手厚き御取扱ひあつたも必竟大谷新門跡が居るからだ大日本帝國の貴族であるからぢや只だの平民の僧侶のみでは之れ程迄にはゆかなかつたであらふ今其の時の日割順序を書た日記があるから一寸讀んで見やう

（抜萃）

佛骨奉迎始末

初日（六月十二日）　使節は正午より王弟クロマプラー親王參謀總長チラ親王宮内大臣ビヂアロープ親王文部大臣バスカラウランゲセー侯爵を稻垣公使の紹介にて着遲御挨拶の爲め順次に往訪す

二日（同十三日）午前文部大臣大谷正使を公使館に來訪せらる、午後新派本山に參詣大像拜覲幷に巴里語學校參觀歸途地方總長ナーレー親王を訪問す此夜文部大臣邸に夜會の催しあり同邸は湄南河の西岸に在り最も風致に富む加るに數百の球燈を樓の上下と庭面一杯に懸け連ね河中の浮屋に迄紅燈を點火せし有樣は實に宛然たる龍宮城かと疑ふ計りにて正賓は大谷新門跡藤島前田日置の三使節南條石川大草の三隨行員稻垣公使等陪席し歡を盡して散せしは翌十四日午前二時頃なりしと云ふ

三日（十四日）　午前佛骨安置處なるサケット寺と舊派本山に參詣歸途宮内大臣を訪問す　午後四時國王陛下に謁見正副使節の外僧侶に限り同じく謁見の榮を賜ふ其の人名は

正使大谷派新門跡大谷光演　使節本派本願寺藤島了穩臨濟宗妙心寺派前田誠節曹洞宗日置默仙等の諸師幷に稻垣公使石川大草他隨行員なりし此日陪席の貴顯は宮内大臣文部大臣侍從武官長幷に宮内文部兩次官等なりし國王陛下は日本勳章を帶びられ出御遊ばさる此とき文部大臣起て佛骨奉迎使一行を御紹介申し上げ終て奉迎表文を正使大谷光演師朗讀す

大日本帝國佛教各派を代表したる眞宗大谷派大谷光演眞宗本願寺藤島了穩臨濟

宗妙心寺派前田誠節曹洞宗日置默仙謹で言す

大暹羅國王陛下聖德天の如く高く仁澤地の如く潤し爰に優渥なる聖慮を降し釋迦大覺世尊の遺形を我が日本帝國某等佛敎者に頒與し給ふに依り谷宗派管長は光演を奉迎正使に了穩誠節默仙を奉迎使に撰用し遺形奉受の任を囑托せり光演等此任に膺り聖明に咫尺し玉體の淸爽なるを拜したり何の榮か之に加んや伏て望む陛下外護の力を增隆し給ひ十善の資を保有し給はんことを光演等誠恐誠懼の到りに堪へず右朗讀終つて國王陛下玉音爽かに左の敕語を賜ふ

敕語

佛世尊の神聖なる遺形の一分を受取んが爲に始めて來れる日本の佛敎徒奉迎使を見るは朕が頗る喜ぶ處なり朕は卿等が千里の波濤を越て來れる誠意に感ず惟ふに南北佛敎は宗規慣習異なる處ありと雖も之れ後世境域隔絕の致す處にして其同祖たるに於て誰れか異議を挾むものあらむや

朕は佛敎の先導者にして其保護者たる事を承認せられし上は奉迎使に神聖の遺形を分配するは甚だ喜ぶ處なり

後前日本佛敎徒が此の神聖なる遺形の分配を得さりしは彼等が其一分を得ん事を欲望すべしとは朕が認識せさりし故なり今や此の寶物の一部を得て日本に安置し巡拜の便を得せしめんとする彼等の願を認容せし上は之を手渡するは尤も朕が欣ぶ處なり

奉迎使の此國に來り且つ普通協同の利益の爲め開明の事業に倦怠なき盡力の程は朕の感謝する處にして日本佛敎徒が海外佛敎徒を熟知し一層交際を親密にしたる後は日本佛敎の益々隆盛に到るは朕が偏に切望する處なり

右勅語終り奉迎使に限り陛下より一々握手の禮を給ひ且つ種々の御言葉ありたり

歸途內務大臣農務大臣大藏大臣を巡訪す

四日（十五日）午前華族女學校及び其他學校參觀午後王城の側釋尊寺（ワットポー）に

於て御遺形授與式あり

當日午後四時使節隨行員等悉く公使館に集り横尾氏之を撮影す同三十分文部書記官の案内にて式場に向ふ途中大雨に逢ひ五時漸く式場に達す時に文部大臣バスカラヴヲングス侯は敕使として已に先着し居られ式は五時二十分に始り同五十分に終る遺形は勅使より黃金製の圓錐塔に容れしまゝ之を大谷正使に手渡し使節幷に稻垣公使立合の上點檢を爲し茲に全く遺形は日本佛敎徒に奉受し了せり夫より列席幷に參觀人に茶菓の饗應あり七時使節一同公使館に歸り四名立合の上封印し歸朝後各管長の面前にて開緘の筈なりと云ふ式場參列者次の如し

文部次官以下屬僚數十名　遲羅僧正二十六名　安南僧正

遲羅貴顯幷に在留日本人悉く參觀せり

勅使文部大臣バスカラウヲングス侯の演說

余は大日本佛敎各宗派を代表せる智德なる諸師に對し吾國王陛下の勅命により國王

に代りて此盛典に列するを以て無上の名譽とするものなり今日本佛敎徒を代表せる諸高僧に授與せんとする該聖物の由來に到つては敢て今更小生の喙々を要せず又た諸高僧も今にして此れが辯解を聞くの必要を認めざるべし若し强て之を知んと欲せば余は彼の專門家が調査により國王陛下の出版にかゝる由來書に一任すべし

昔し大聖釋尊が御入滅の當時に溯つて御遺形を頒ちし狀況を追想し奉り佛敎國大君主の優渥なる敎慮を蒙りて御遺形を頒與する事に比較せば吾等が宗敎に對する熱誠は南北兩宗の傳播せる佛敎國に著明なる事亦た自ら誇るに足る

我國王陛下が佛敎を外護して王位に登り以て撫育する事皆佛陀の慈懷に則らん事を希望し給へり自今以後日遲兩國間一層の親交を增長し敬虔なる佛敎の信仰力に依賴して世界の善事を振興せん事を希望し給へり

切に望む諸高僧等海陸無恙此の聖物を奉護して早く日本に歸り信交なる信徒をして聖物の下に感謝の意を致さしめよ

次に正使大谷光演師起つて左の文を朗讀せり

爰に我敎主釋迦大覺世尊の遺形授受の盛典を擧げられ添ふに大臣閣下の懇篤痛切なる式辭を給ふ光演等此の機會に値遇するの榮何ものか之に如んや蓋し道に南北あり人の機根に殊別ありと雖も光被する處の慈悲解脫の途は一なり之に依り將來益々日遲兩國同敎の和親を厚ふし世尊の遺形と大遲羅國王陛下の勅旨を全ふせんことを希望して已まざるなり

大遲羅國王陛下を始め文武百官諸公の我奉迎使等に對せらるゝ好意は光演等深く感銘す之を本國同敎同胞者に傳達する事あらば彼等の歡喜して貴國を敬愛欽慕するの念慮切なるべきを信ず且つ遺形は佛陀の光明と共に永く護持保全し尊重禮讚すべし

光演等は本國佛敎宗派管長を代表し大遲羅國王陛下の萬歲を祝し兼て陛下臣民の幸福を禱る謹で答辭を呈す

大日本明治三十三年六月十五日

奉迎正使　大谷光演

奉迎使　藤島了穩

同　前田誠節

同　日置默仙

五日（十六日）午前王城內寺院及び博物館大白象等巡覽午後司法大臣の新苑內の新築、寺院に詣づ兼ては本日御苑に於て正使以下に茶菓の御饗應ある筈なりしも雨天の爲め延引せり

六日（十七日）此日は內務大臣ダムロン親王の饗應を受る爲め舊都アユチアに行く正使以下一行二十一名なり

午前第八時パイヤッセ停車場より特別仕立ての汽車に乘じて正午アユチア着此處には兼て政府より派遣せられし接待官あり一行を導き小蒸汽船にて湄南河を溯る事大凡二十分にして當州知事の官邸に着し午餐の饗應を受く食前方丈頗る丁寧なり內務大臣俄

に公務の爲め差支を生じ出席し得ず令息某父親王に代り東道主人となり十二分の歡待を爲せり午後第二時知事代理其他の接待員に導かれ再び小蒸汽船に搭じ狩象場を一覽し又た歸船し流に從て下り第四時ボンボインの離宮に到る此處にて宮内省より晩餐の饗あり四時二十分離宮監督官等に送られ再び汽車に上り海暮歸盤す

七日（十八日）　午前日本人墓地行　午後第二時參内御陪食あり之より先き宮内省より御料馬車日本公使館に來る一時三十分正使新門主は稻垣公使と同乘藤島前田日置の三使節幷に南條博士も各馬車にて接待員に導かれ王城に向へり

御陪食の模樣は頗る鄭重にして大谷正使に對しては總て皇族同樣なる御取扱ありたりと云ふ其陪席者は

大谷正使藤島前田日置の三使節南條博士稻垣公使遞羅内務大臣宮内大臣文部大臣侍從武官長外務次官宮内次官文部次官等にて外務大臣は去る十三日自轉車より墜落し負傷加療中なるを以て參内せず又た内務宮内兩大臣は親王文部大臣は侯爵侍從武官長宮内

文部次官は伯爵外務次官は子爵なり

御食事中陛下より種々御懇の御言葉あり終て別室に誘はれ此處には二個の佛像を排置しあり一は他日釋迦堂建築の節之れに安置すべき爲め日本佛敎徒に贈らるべきもの一は特に大谷派本願寺に贈らるべきものにて共に八百年以前の製作に罹り遞羅國寶中尤も貴重なるものなりと云ふ此時陛下御自身佛像に就て詳細の御說明ありたり且つ陛下より別に經典と釋迦堂建築用材とを寄進せられ其他親王貴族等よりも種々の寄進ある筈なり

右佛像拜覲の時は眞宗禪宗各々別に讀經あり陛下各大臣等總て嚴肅に聽聞ありしと云ふ

式終つて退出の時大谷正使の挨拶に對し左の勅語あり

一　日本佛敎各宗派が協同一致して神聖なる釋尊の遺形を奉迎する事は朕甚だ喜ぶ處なり將來益々其協同力を堅固にして有益の事業を興起し宗敎上の利益を普通ならしめ

最初の一念を貫徹する樣にありたき事を朕は同一宗教を信奉する上より深く企望する處なり奉迎使は已に此地に於て作すべき事を成し終りたり今後は我この宗教が益々日本に隆盛に赴くべき事は信じて疑はざる處なり尙今後各宗派の協同一致して布教の策を經畫する事に於て助力する事あれば朕は前にも言ふ如く同一宗教の信仰上より如何なる事をも辭せざるべしと貴師等に約束す

今日朕が日本佛教徒へ寄贈する處の佛像は今度受取られし釋尊の遺形安置處に同じく安置ありたし王后よりも三藏聖經の寫本を寄贈すべき筈にて之を入るゝ處の錦嚢を手製中なれば之は後より差送るべし

御遺形は大切に護持して無難に本國に歸着し速に奉安處を定めて之を尊敬せらるべし尙海路平安諸師健全にして歸國せられん事を切望す

今夜稻垣公使は大谷正使を始め使節隨行員重なる在留本邦人遲羅皇族大臣次官在留外國交際官紳士等を招き夜會を催せり午後九時より雨を衝て來會するもの無慮一百餘人頗る盛會なりし

八日(十九日)　奉迎使の爲すべき仕事は昨日にて全く終り一行は無上の榮譽を擔ひ本日正午出發新嘉坡を經て歸朝の途に就かる筈にては印度に赴き釋尊の遺跡を參拜の筈なりしも國王陛下御懇の詔諭あり且つ勅使を日本佛教徒に派するの內敕もありたれば旁た歸期を急ぐに至れり一行の便乘船コラット號迄は公使館員在留日本人總代等見送りを爲し當國貴顯も見送くる筈なりしも酷暑の際ゆへ之を謝絶總代表者として文部大臣バスカラウヲングセ侯其令息並に秘書を伴ひ本船迄見送られたり云云

信認狀

大日本帝國佛教各宗派管長は

大聖世尊御遺形奉迎の爲め眞宗大谷派新門跡大谷光演を奉迎正使に眞宗本願寺派藤島了穩臨濟宗妙心寺派前田誠節曹洞宗日置默仙を奉迎使に選擧し佛教各宗派の代表者たることを信認す

明治三十三年五月

天台宗座主　中山玄航
同寺門派長吏　山科祐玉
同眞宗派事務取扱　石山覺湛
眞言宗長者　原心猛
淨土宗西山派管長　清水範空
臨濟宗天龍寺派管長　橋本峨山
同　相國寺派管長　中原東嶽
同　建仁寺派管長　武田哩雷
同　南禪寺派管長　豐田毒湛
同　妙心寺派管長　小林宗補
同　建長寺派管長　霄貫道

同東福寺派管長　濟門敎冲
同大德寺派管長　菅廣州
同圓覺寺派管長　釋宗演
同永源寺派管長　久松琢宗
曹洞宗管長　畔上梅仙
眞宗本願寺派管長　大谷光尊
同大谷派管長　大谷光瑩
同木邊派管長　木邊孝慈
同高田派管長　常盤井堯熙
同興正寺派管長　華園澤稱
同佛光寺派管長　澁谷微妙定院
同出雲寺派管長　藤善聰

信者●●　話しが後へ戻りますが、此の御舍利は唯だ佛の御遺骨であるから、御迎をすると云ふ計りで。別にお舍利に就ての、理屈はないものでありますかへ。

同山元派管長　藤原善住
同誠照寺派管長　二條秀源
同三門徒派管長　平光圓
日蓮宗管長　岩村日融
時宗管長　河野覺阿
融通念佛宗事務取扱　梅原靈嚴
黃檗宗事務取扱　佐伯蓬山
法相宗管長　秦行純
華嚴宗管長　佐保山晉圓
眞言律宗管長　佐伯泓澄

僧●　夫は中々高尚なる問題で、我々如き愚僧等の辯別る話じやない。併しそふまでいは何だが物足らぬ氣がするから、及ばずながら外に話するとしよう。

偖て此のお舍利は、如何にも佛骨であるからお迎するに相違ないが、他にも隨分澤山の英雄豪傑はあるけれども、佛敎信徒が自己の本分として、お迎へ申すは佛骨であるからである、併し此處に理屈があるて、唯だ佛骨だからと云へば、彼の或る派の人々が云ふ報本反始と云ふ、普通の禮儀に止るのじや、報本反始と云ふ事は社會の秩序が爲ら重に云ふ事にて、宗敎眼から云ふちと解釋が違ふて來るのじや、先づ報本とは本に報ゆると云ふ文字にて、反始とは始に反ると書く、本とは人類から云へば御先祖で、始めとは社會から云へば社會組織の功勞者である、之を日本で云ふ時は天照皇大神は本にして、其他の群神列聖は始めである、其本の天照皇大神があつたから、萬世連綿と天地と共に變異なき、皇統と申して天子樣の御家が出來た、又た其時分から、此大神を輔佐し奉りし群神があつて、天地の根本より豐葦原の中つ國の形勢に鑒み給ひて、

千世萬代かけて移動なき國體の始めを經營し給ふた、之が始めである、本も始も解釋の仕方でどふでもなるが、詰り日本から云ば、日本と云ふて萬國に比類ない、美風良俗の國が出來たは、何か原因がなければならぬ、其本源因由は何んだろーと、詮議して、見ると、第一に天照皇大神が現れる、次に神代群神より人皇は神武天皇以來の列聖賢相が出て來る、其處で我々は此萬國に卓絶した、御國に生れた事があら難有やと思へるソー思へばどうでもこふでも、上は天照大神はじめ下群神より人皇の御歷代を忘るゝ事が出來ぬ、夫を忘れる樣では、所謂恩義を忘却する者にて人間とは申されぬ、其處で何んでも本は忘ぬ樣にせねば此國が榮ぬ、始めは覺て居らねば、義理が濟ぬと云ふ樣になる、それから本に報いよ、始に反れと云ふ道理が出來て來るのじや、そんなりや夫で充分して居るかと云へば、中々そふでない、成る程其敎は惡い事はない、そふなければならぬけれ共、夫では餘り淡泊無味で、唯夫れ計りでは神や人の靈魂を見認て居ない樣な感じがする、靈魂の常住不滅を認ずして、そんな事をするは殆んど虛禮である、つまり本と始を忘れぬと云ふ方便に過ぎない、仮令へば伊勢の大廟は、天照大神を齋き奉りし處であるから拜むけれども、神靈の在否は知らぬ、先づ神と云ふ實體が見へないから、神靈は認められぬと云へば、伊勢の大廟へ參詣するは、丁度空家へ往て挨拶をする樣なものである、如何に丁寧にしても神を祀る父母在すが如し位の處で、勉てそふ思ふ丈けの事じや、父母が目の前に居るかの樣に、想像して祭をする時は、祭祀が粗末にならぬと云ふ如き、方便に過ぎない、此處ではまだ三世を一串する、靈魂不滅の眞理を認めて居ないのじや、其靈魂則ち神で云へば神靈じや、其神靈を認めずして、苓りに頭を下げて禮をするのは、實に判らぬ事にて、之を世に云ふ虛飾である、そして報本反始と云ふ事も、今日の人の思ふ樣な淡泊無味な話じやない、伊勢の大廟へ參拜しては、現に天照大神に接するものじや、北野天神に參詣してはあり〳〵と菅原道眞卿に親むのじや、天照大神の神靈と我が本來の心鏡と、兩々相對して神は吾に映じ、吾は神に寫るのじや、此處は神の居た處じやから、此處はどふした

○

處じやからと云ふて、紀念的に想ふ位では、とても神の本躰に通じて、眞正の報反の道は盡されぬ、夫を知らずして祭をしたりするは儒教で云ふ、其鬼にあらずして之を祀るは諛ふなりの本文に當るのじや、宗教に餘り關係なき儒教でも、こゝ迄は信じて居るのじや。

そこで此の御舍利だて之を迎るに、唯だ三千年の古い骨を貰つた位いの考へでは、信仰の實躰でない、現に生身の釋迦牟尼如來を御迎へ申すのじや、併し此說明は中々我々では判る樣に云ふ事も出來ねば、聞ても一寸は分らふ筈もない、しかし彼の眞言宗新義派の祖師興敎大師は、舍利和讃と云ふものを、御書きなされて其中に。

一代化儀に事終へて
　大悲方便止まずして
　四德の都に還れども
　舍利を留め置き給ふ

云々と、御說きなされたのじや、然れば釋迦牟尼如來が、佛の出世に値遇せぬ、吾等の如き不幸ものを憐み給ひて、入涅槃後にも此舍利を御殘し下されたのである、和讃の文句に大悲方便止まずしてとある、此の只今お互にお迎へ申す佛舍利は、末世の我々をして疑ひなく正信を興させんとてお殘し下された御舍利である、故で此のお舍利は、肉眼の如來身とは遜へども、大悲の方便には聊かも變りないから必ず之を信ずる者乃ち佛弟子は、屹度菩提を證得して、お覺を開く佛となるに違ひない。

殊に日本へは、是迄隨分澤山のお舍利が渡來して居るから、別段お舍利は珍敷事は無い樣なものゝ、正式の大儀式を設けてお迎ひするは、實に今度が始めてである、尤も欽明天皇の朝に彼の善光寺如來と一處に渡來したお舍利はあれ共、元と朝鮮の百濟王が信仰の餘日本へ曳れたるものにて、未だ日本が之を信仰する程の因緣が熟せなかつたから、今度の樣に歡迎せられなかつた、寧そ侮辱せられた方であつて佛像や御舍利は遙々と、百濟王の信仰を利導して日本へ這入たものゝ、日本では置くか置かぬか抔と議論が喧敷、凡で厄介ものを取扱ふ樣な、評議が始まつた位であつたから、折角渡來した佛像お舍利も、早速日本の衆生を感化する事が出來ずして、聖德太子の御成長を待つたと

云ふ、哀れな有様であつた、そういふ譯で一方は國王から大盛典を以て送りしものが、日本では厄介物の様に受取られたけれ共、佛の善巧方便と云ふものは、實に驚くべき程のものにて、僅の間に全國へ滿ち〳〵て日本國中を擧げて上は一人の天子様より、下は我々青人草の庶民迄を佛弟子として、詰り佛儒兩道と相和して吾古道の神道を祐けて、終に此の萬古不易の日本の、國躰國力を建設したのじや。

昔の佛舍利はかう云ふ工合で、始めて日本へ渡來した、其時は未だ朝廷にも人民も一人として佛教の難有味を知つた者のない時で有た、夫でさへ斯程の大功を奏した佛像佛舍利經論である、是がドー云譯かと云ば外の宗教を見た様に、國禁を犯して狐鼠狸と這入て來る様な、事蹟と大に違ておるからである、元と公然と百濟王が日本へ佛像經論を貢獻したは、決して別に野心が有たではない、日本を崇敬の餘り飽きも飽れぬ、平素至心に御供養申す佛像を貢獻した、ソーして此佛道の功德にて猶此上に日本の政道を、飽迄も立派に仕度と云大願から贈たので有る、處が其時分に未だ機緣が熟せなかつたから、御佛像はジッと泪花の堀江に蔭れて、時節の來るを待て御坐ると、聖德太子が天皇の王子として御迎申す様に成た、其所で始めて佛の大慈大悲の活方が實地に働く様に成つた、ソーすると元は設令異國から來たにせよ、根が野心とか何とかで、自分に好ても他が迷惑すると云様な、攘奪主義の御手先に働く様な宗旨でないかち、來ると間もなく日本の佛教と成てシマッた、夫じやから日本國の大利益を謀て、國の光輝を宣揚す様に成つた。處が今度はドーじや、遲羅と云苟も一國の大王から、直接に我々日本の佛教信徒に下さるのじや、昔は國から國へ貢獻したから、朝廷が御受取に成つた、夫じやから之を廣布する責任も上ッ方に在ッた、夫で政府内に守屋大臣の様な人が有ると、之に邪魔せられて衆生濟度が出來無ッた、ケレ共今度は左様なくて、日本三千萬餘の佛教信徒全體に被下たのであるから、ドンな佛教嫌の大臣が有とも、國會議員が有とも、少しも關係なく働く事が出來る、其有様は丁度釋迦牟尼如來が遲羅國王に紹介せられて、日本へ御渡航ありて、四辨八頓の妙舌を振て、縱橫無碍の大法輪を運轉し

て、所有衆生を濟度すると同一般て有る、何ンと愉絶快絶じやないか、個樣なるも悉皆佛の善巧方便で有て、遥羅國王が日本へ吳度も、稻垣公使の骨折も、石川參務の躍起も、遥羅通岩本鐵脚君の先發も、各宗各派の一致合同も、皆佛の方便に使はれるので、お互にコー爲て騷ぐは、丁度昔天竺各處の人民が、狂氣の樣に成て如來を歡迎したと相違はない、之を覺者の眼から觀たら、悉く菩薩の遊戲三昧で有らふ。

昔の佛像や經典や佛舍利は日本の國民を濟度に來た、夫は未た日本に佛敎が開け無つたからで有る、今度はソーで無くて、世界の衆生を濟度する準備に御座つたのだろふ、其證據と云よ者は、佛は今回其有緣の地へ新に法體を御分身被成たが、大小二乘の完備た國は、日本より外に無いから、此世界的濟度の運動には、日本の佛敎信徒が、起ねばならぬ樣に成つて來た、釋迦如來の豫言には、吾法は東北方に宣流ると云ふ事を、大般若經とかに載せて有るソーな、成程天竺を古鄕として漸々諸方に擴張した佛敎は、先天竺から支那へ來て、夫から三韓を歷て日本へ渡た、之は東方に當て居る、其他の一方は緬甸の老撾の山河を經て、西藏より蒙古、滿州より西比利亞の方へ、涉た樣は北方になる、如此佛敎の宣流は此迄始終東北に向たが、日本を除く外は、大概小乘佛敎計りが殘ッて、大乘敎は滅亡した、夫れで大小二乘完備の國と言たら、五大洲中日本より外に無い、彼禪宗のお祖師の達磨大師が、天竺から遙々支那へ渡つたは、ドー言ふ譯かと云と、天竺は最早や大乘有緣の地でない、何んでも、東方大乘宣布に適當の地じやと、謂つて來た所が來て見るとドーもソーでない、劈頭第一に梁の武帝に謁て、非常に失望した、ソコで是は何んでも、機運が來るのを待より外にないと思て、此北支那へ渡て少林寺の庵室へ隱退て、九年面壁と出掛た其中にドーかコーか、法脈を授ける丈の事が出來て、二三の大弟子を手に入た、所が之はツマリ其法脈を嗣だ迄の事で、眞個に大乘佛敎が、國家社會ツマリ政化に參じて、現當の大活動をしたのは、日本へ來てからが重で有る樣な、左れば聖德太子は前生に支那に於て達磨大師と約束して、達磨は支那に留まり、太子は日本へ生れた、ソコで太子

が勞頭に守屋大臣を御征討に成つて、段々堂塔の建立から、經典の講釋、ツマリ佛敎の布敎を遣りかけた時、船岡山で一人の乞食に遇つた、夫が達磨大師の變化身で有つたと云、古說が有る位にやが、兎に角日本では入朝の最初には、守屋大臣等の反對說が有て、一寸邪魔せられたれども、聖德太子の手によりて、直ちに政化に參與して、大功蹟を顯す樣に成た、ソコで聖德太子御自身が、庶民に卒先して宮中に於て、佛典の御講義がある、御經の御註釋が出來る、マダ夫計じや敎法と國風とが別々に成ると云處から、十七憲法と申す法律を製作した、是が所謂神儒佛、三道の粹を拔ひて造た、日本法律の嚆矢で有る、其中でも篤敬三寶と云文に重を置れた、そして三寶とは佛法僧也と御註釋被成た、之で大概佛敎が何云方針で、日本で運動しかけたかと云事が推察せらるゝ、彼支那周代の大聖人周公召に比較して、其宏德を稱へまつる、鎌足公の古今の大忠臣大政事家と云事は、誰も知て居る、彼お方の如きも矢張聖德太子の聖慮を繼ぎたる、熱心の佛敎信者である。

夫から專門の敎法家としては、役の行者の小角の樣な人が出て敎法宣布の傍に、國土の拓殖に盡力をして、深山大澤を開ひた、夫に續いて行基大士の如き高德が現れて、時の天子の勅命を受けて、天下を周遊して皇化を布及するを、一生の事業とした、間もなく天台の傳敎、眞言の弘法が出世して、茲に平安佛敎の新面目を開いた、殊に弘法大師が國民に化を貢獻して、千歲不磨の偉蹟を遺した事に至ては、誰がドンな事を言ても古今獨步でおろー、政治家としては、菅原の道眞卿大江家累代の如き、金剛不壞の信者が出で、敎力を以て國家を導た事は尋常でない、是迄は重に貴族的宗敎の傾向が有た、然るに貴族的宗敎に、漸く弊害が出來ると、此度は一向念佛の所謂平民主義の法然が顯れて、旺に淨土門を唱へた、ケレドモ未夫れで濟ぬから、後の大任を弟子の親鸞に讓た、ソコで親鸞は藤原兼實の女と結婚して、茲に純然たる日本主義大乘佛敎の一大新面目を完成した、處が此頃は天下の政權が武門に歸して居て、藤氏執權の時と違ひ人物が無風雅で有る、夫で有から佛敎が彼の政治に參はるには、高尙

なる教理はとても彼等は靜聽する餘地がない、また夫かと云ふて簡短なる念佛門は、何んだか卑屈に見へて、彼は甘んじて遣ない、ソコで出會したが、臨濟の榮西、曹洞の道元と云樣な英傑でありて、最も單純活潑なる教外別傳の禪風を煽動した、ソコで武士と云武士は靡然として禪門に歸入した、ソーなると、貴族は天台眞言に傾き、武士は禪門に、平民は念佛に歸すると云ふ樣に成つた、ソーなると復た夫相當の弊害の出來る者で有から、其弊害を觀破して所有宗旨を敵として、現れ出たが古今稀有の英斷家で、南無妙法蓮華經の旗幟を翻して天下の一方に虎號した、彼の日蓮で有る。

如前陳工合に、日本佛教の歷史は、始終國家國民と云ふ事が元に成つて、進化して來たので、決して山の上森の陰に隱れて、世を魔界の樣に心得て、獨覺遁世を主義として、僅に人の捨物を拾て、生活て來た厭世教で無い、夫者から時としては、僧侶達がサー一天萬乘の天子の御大事じやとか、或は一山一派の危難じやとか云ふ時には、忍辱慈悲の法衣の下に、被甲莊嚴の鎧を着て、左りに熙怡降伏の黑繩を執り、右に怨敵退散の彌陀の利劍を振て、血膿さ修羅の陣頭に立た事は幾等もある、世間の沒理漢の國學家や、腐儒の輩が、一二の時弊を探求て、何んとか蚊とか、攻擊するは實に片腹痛い事である、此樣にして鍛に鍛ひし日本佛教で有から、何國へ往ても、必ず其國民を敎化する丈の實力がある、處か茲二百餘年程德川政府が、鎖港の政略を取たから、折角鍛錬の腕が鈍つて、左迄の活動が無つた、けれども今日の如く、世界の交通國と成た、日本は世界の何處へ往ても、日本人の名譽を信せらるゝ樣に成た已上は、當然日本佛教が世界的大運動を、爲にやけりやならぬ時機が熟したのじや、夫と見れば丁度日本が中心と爲て、東は阿米利加北は露西亞當りへ、傳播せなければならぬ樣に成つて來た、現に米國人の中にも往々佛教を信ずる者が出來てゐる、夫のみならず最も頑僻なる希臘教を信ずる、露西亞の國民が盛大なる儀式を以て、今度佛舍利を奉迎したと云ふではないか、コーして見ると兼て大般若經の東北方品の處說がチヤンと符節を合する樣に成て來る寶に不思議なる氣運である。

處が悲哉我佛教は、古來二百餘年間の長夜の夢見が、醒めかねて睡眼朦朧で社會の大勢が判らぬ、ダから日本と云器は、現に郡縣政治にあらたまつて代議政體を實行しておるのに、昔は國家を引導して來た佛教が、今は却て國家に牽制せらるゝ樣に成て、社會の大勢に後れて、昔の封建割據の慶を貪て、合同一致と云活動がない、此樣の事では、兎ても世界的大運動は出來ぬ、是では世尊の大慈大悲の本領を實行する事が出來ぬ、ダカラ釋迦如來も餘程氣がモメル、處が流石は佛じや神通自在の如來樣はソコには少しも序際が無から、是非否が應でも日本佛教が、合同せねばならぬ樣な、苦肉の狂言をした、其狂言は現に此頃の事で有つたから、お前達も知て居る筈ジャノー。

信者　諧謔言チャ困り升、何んで如來樣が狂言なんか被成ずる乎、夫ンな事は仰しやらず難有、お舍利のお話を聽して下され、

僧　ナニ如來も折々は狂言も芝居も遣るじや、此頃は狂言と云は、アノ夫宗教法案の大騷サー、アレは凡眼から見ると、實に腹の立つ悲イ恨イ樣な事なれ共、實際は難有事で、火吹竹の根は竹藪に有る樣な者で、一切佛の采配ジャ、アの法案の一件が無たら兎ても各宗の合同は出來ぬ、先法案が出から少位各宗合同の端緒を開ひた、是等は皆序際なき佛の善行方便で有つて、日本の佛徒を喫驚さしたのだ、スルト未々何とか蚊とか云ても、全國に殘てある佛教の潛勢力は非常な者で有るから、見る〳〵中に美事否決と成た、コー解釋をすると、彼法案を出した山縣内閣は、日本佛教の敵の樣に見へても、佛教の爲には是が大なる興奮劑と成つた、所謂反對の恩惠逆緣の外護で、丁度昔聖德太子に反對した、守屋大臣は地藏菩薩の化身ジャとしてある古說と、好一對であると云た人も有るが、何でも佛教家のドン腹は太キひ者ではなひか、之がアの怨親中の作用だろー。

處がまだ〳〵、夫ンな事では追付ぬ、是はホンの三番叟として、一寸端緒を明ける位の事にして、其次はドーしてヤロと、釋迦牟尼如來は慈愍攝取の兩手を組んで、考へ

て見ると、何樣我慢强き日本の子分等の、合同一致は已が行ねばとても出來ない、イデ灰に成ても骨に成ても、一番日本へ出掛けて三千餘萬の子分を纏め、五大洲の大舞臺へ乘出しの用意をショウ、夫に就けてはドーヤローヨシ〳〵コーシテやろと想着たが、此佛骨奉迎の事になる、其所で南方弟子の頭分、遲羅の國王へソッと手を廻した、すると矢張大乘國民の一人稻垣公使が佛の方便にのせられて、躍起と成つて遲羅國王へ分配を申込むとなる、ソコデ國王は一個の宗旨へはやらぬ、日本佛敎徒全體へヤロとコー云た、すると否が應でも各宗が合同して、奉迎せねばならぬと云ふ樣になる、之が第二の日本佛敎合同の狂言じや。

信者　ヘー成程如來樣の、狂言は隨分面白難有仕組ですな、夫は誰かの夢にでもお告げが有つたのですか、そして其次の狂言は何んで御座り升か。

僧　ナニ佛が別に枕神に立て、誰かに告げたと云ではないが、マー如此宛推量の出來ぬ事も有まい、夫じやから日本佛敎徒は、兎ても浮かりとしては居られぬ、そして第

三の狂言は、佛も信徒も中に汗の流れる骨折の幕じやから、お互に車輪に爲て遣付ねばならぬ、兎角舞臺が五大洲一ぱいじやもの、其所で其準備を爲ねばならぬ事と成つた、夫を爲には、先づ僧侶は僧侶學者は學者實業家は實業家で、凡べて信徒と云ふ信徒は各々其本分に應じて夫相當の力を盡して、精一パイ力一パイ、遣て〳〵遣付けて、皇國の光りと共に御法の光を輝し、五大洲中往〳〵處に吾大乘佛敎の種子を蒔付る樣にして世界萬國の人々を同一佛の御弟子にする考を持たねばならぬ、屹度ソーせよとの此度の佛の敎敕で有る。

信者　成程大シタ者で御座り升な。ソーなれば御國の譽れ佛法の面目と言ふものは、實に治大な者ですナー、若しソーなりや、吾々日本の信徒は世界中の人の恩人となる。其樣な名譽の働が出來は、此度御勸請申す御舍利の御蔭樣で御座ります、イエお舍利と思ふと違う、生身のお釋迦樣じや、其生身のお釋迦樣を御贈り被下たところは、遲羅の國で有りますれば、其遲羅へは何を御返禮に致します、ツマリワッチ等社會でも、

酒を貰へば團子とか、肴を貰へば菓子とか、何にか返禮を致しますが、今度はコンな難有物を頂戴し乍ら、眞眨貰得には參りますまい。

僧　左樣〳〵お前の云通じや、決して貰得とは參らぬ、此には何か返禮せねばならぬ、ツマリ世の中の事は交換と云事で成立て行く、酒を呑でも獻酬と云ふ事がある、物に報酬と云事がある、夫等は皆人間の禮じや、此禮がなければツマラヌ、君に忠義も親に孝行も人に親切も、天地自然の大義大禮と云へ、一方から觀れば交換仕事じや、鳩に三枝の禮あり、鴉に反哺の孝あるも、交換の寫眞じや、其所で今度遐羅から貰た物に對しても、只貰得とは參らぬ、何にか之に返禮せねばならぬ、處が之が天下一品の。大切な佛の御遺形である、殊に之が元と成つて、世界の人を大乘佛敎の信徒にでも爲て見よふと云ふ程な、大威力の有る聖物であるから、ドーも返禮の品に困る、天下一品と聖物に對しては、矢張天下一品の物を返さねばならぬ、夫は宜がドーも容易には見發にくい、アル……單た一ツ有る、夫は何か和魂で錬上げ鍛上た大乘佛敎で有る、此品は五大洲中ドコにも無い、所謂天下一品で有る、抑も大乘でも小乘でも、其原は一金口の釋迦如來から來たに相違なけれども、外の國には種切に成て居て、日本計りに在る、夫はドー云譯かと云ば外でない、日本には和魂と云吾國獨特の長所がある、之が六ケ敷言へば國家の精華である、日本國民は之が本となつて大乘佛敎を研究したら、重に大乘が盛に成た、此が則大乘有緣の地と申す譯じや、此活た魂を以て佛敎を研究するから、吾國の佛敎は外の小乘敎の樣に、枯木死灰にならすして活て働くのじや、其證據は實に澤山有るども、今は中々申し盡ぬから畧してお〳〵、就中王法爲本と立てる、眞宗の如きは公然明文を掲げて、信者の安心立命を示す中にも、國恙王法に重きをおいた、夫じやから後世戰國の代に及んで、王威不振の時卽位の大禮に、事を缺き給ふ樣な事が有れば、御獻金を申上げて國史の汚點を拭ふた、其精神が古今を一貫するから、明治維新の際などには、多〳〵浪士を庇護して王事に勤めた、其他門末の僧徒の中から防州の月性上人の樣な人が出て、勤王の大義を天下に虎號した、此

等は皆大乘佛敎のお蔭で、王法爲本の宗意の精華で有る。處が自餘の國の人は小乘敎計を信じて、佛敎の極處と思てゐる、此小乘敎は釋迦如來も開敎の順序として、不得已お說成されたラシイー、可相成始から太乘敎で遣付たから、山やら出山の釋迦と顯れても丸で珍文漢で仕方がない、其筈ジャ丁度小學校の生徒に大學校の敎課書を購讀して聽した樣ナものジャから、其所で流石の釋迦如來も大に閉口した、天から更らに工夫を變へて、今度は阿含部の小乘人天敎から說始めた、スルと瞬く間に數百千のお弟子が出來た、其後阿難尊者が小乘の修行を成されて、ヤッとの事で阿羅漢果を得られた時、モー大丈夫と大に慢心を生じた、スルト釋迦如來が大音あげて、寧ろ野漢（野狐）となるとも羅漢になるなとお叱りなされた相な、夫を聽た阿難尊者は大に失望して、鐵鉢を投り出して大聲上げて號哭と云事がある、サー外の國の佛敎は、釋迦如來が野漢になるとも羅漢になるなとお叱り被成た、宗敎で有りて固より敎の階梯佛の糟粕であ

る夫じやから兎角此小乘を信ずる國は、ドーも人氣が薄弱て仕方がない、印度も緬甸も薩張りツマラヌ、遲羅の如きも今日では先づ立派な獨立國で有るけれども、ドーも國に元氣がなく始終外國から侮辱を受けてゐる、若し此等國に少しでも日本人の氣象を保したなれば、左樣は容易衰亡する筈がない、決して印度も滅びぬ、緬甸も遲羅も衰はせぬ、處が悲ひ事には、今も言ふ通じやから佛敎が始終世外に立て居て敎化を助ぬからコンな事になる、是が佛敎國が外國から侮辱せられたり、又は門外者の沒理漢が、大乘佛敎まで同一に思ふて、種々輕卒な批評をする主因である、だから此度は日本から此和魂漢才を以て錬に錬り鍛に鍛し、日本主義の大乘佛敎を御返禮に、獻上する事にするとの事じや相ナ。

信者　成程夫は又た格別の御返禮であり升ナ、處で其大乘敎を御返禮に差上るにはドー云ふ方法で致し升、承れば佛法には八萬四千の法門が有つて、八萬四千の衆生の機根にあてゝ、お說に成つたが、世尊一代の御說法で、其お經の員が七千餘卷とか、八

千餘軸とか有る相ですが、夫なら其お經でも、船に積んで、誰かゞ邏羅へ持て往くので
すか。

僧　お前の云のは、大藏經の事である、夫は經論で有つて愚僧が云ふ、日本主義大乘
佛教とは言れぬ、特に其中には小乘の經論も澤山ある、お經の文句計り讀むなら別に
日本主義とか、和魂漢才とか云ふ樣な六ヶ敷事は云に及ばぬ、ツマリ其文句の眞理を
腹に含み込んで、和魂漢才と云ふ胃液で以て之を消化するのじや、夫で無ればお經を
讀んでも、丁度日本の小僧侶がお經の意味に頓着せず、佛前で無意味に暗誦的讀經す
ると一般じや、夫れでは到底本眞の佛心を獲得して、眞正の大乘佛教の光輝を見る事
は出來ぬ、夫で彼の佛舍利の御返禮には能く此大乘佛教を咀嚼して而かも、能く邏羅
國民に說得する丈の、技量の有る人を送る積である、處が困る事には、元來邏羅と日
本とは。風俗が違ひ文字も違ふから、克く邏羅の言文に通じた僧侶と、件の大乘經論と
を併せて贈らねば所謂寶の持腐で何にもならぬ事になる、ジやと申して今日本に其注

文通のお僧が無いから、直ぐ彼國へ往て多くの信徒を集めて、お經を說明して聽す事
が出來ぬ、ダカラ先邏羅國の言文を稽古さして、ソーして的國の風俗に慣れた、人物
を遣る時は、始めて彼國內へ大乘佛教を宣布する事が出來る、其方法を以て茲十年を
繼續する時は、屹度邏羅の國に於て、和魂漢才を具へた、大乘佛教の信徒が出來るに相
違ない、ソーなれば今日のボンヤリの國民も、始めて活潑々地の活て働く信者と變す
るだろー、ソーなる曉にはたとへば國の爲に戰ふても、君の爲めに働ても、忠實にな
る、ソー成た處で彌々日本の友邦と云ふ眞價が出來る、獨立も鞏固になる、外國から
もモー侮らぬ樣になる、國も榮へる君も大慶民も幸福、其元はと云へば日本佛教のお
陰である、ソー成ッた處で始めて今の佛舍利の御返禮が出來る、其方法は色々有るが、
現今其組織の出來て居るので、南亞宣教會と言ふ者で有る。

信者　何程好く判りました、如何にも其方法は、面白話で、必ずソーなければなりま
せぬ、シヲ其南亞宣教會と云者は、ドー云風にして出來た會で有升か。

僧　エーお前との問答も隨分長時間に成た、モー御勤行が始から往かねばならぬ、今日は遲羅のお僧達も御出席じや相ながら、お前も一所に參拜するがよかろ、併し其南亞宣教會の方法を話せば中々長いから、後日の事として御免を蒙り、今日は茲に南亞宣教會の趣意設計書が有るから、先づ之を讀んで見たら、直く詳い事が判然る

南亞宣教會主意設計書（前文省略）

南亞宣教會は大乘佛教宣布を主義とし南北佛教合同を目的として生れたりと雖傍ら日遲通商の爲に一臂の勞を貸さんと欲する者にして此が準備として年々若干の留學生を派遣し先づ遲羅國の言文を練習せしめ滿三年を以て卒業期とし更らに卒業者中適當の學生を撰抜し一ヶ年間同國の僧風を習ひ然後始めて內地樞要の地に分遣して專ら布教傳道に從事し餘力を割ひて日遲間通商或は起業家の爲めに通譯の勞に膺り以て大に彼我交通を圓滑ならしめんとす夫れ如是にして條約締結已來未だ十指にだも上らざる遲羅國に於ける朝生暮死の吾商界を變じて海外的正式の通商家とし

て永く各國人の間に介立して相驅逐するに足るべき乎

素より吾人が微力なる圓滿の計畫は其酬ゆる所に非らずと雖幸に一二有力の士は余が十年圖南の孤忠を憐れみ今回大に助力せらるゝ所あり想ふに將來數年を出でずして遲國內地到る所に遲語遲服の日本僧を見るは實に容易の業にして此と同時に日語遲服の士人が往くに隨て嚮導通譯の役に服すは期して待つべきなり如斯にして南北佛教合同の基礎を築き併せて日遲の當路者をして言文不通の難事を省かしめんとす第一期成効の豫想猶は如此若し且つ餘力の存するあれば更らに第二期より以往の設計を畢し進んで隣邦諸種の言文を攻め漸次南亞宣教の名實を完ふせんとす蓋し圖南策上の急務之に過ぎたる者あるを知らず同感の士女幸に來援せよ

南亞宣教會主唱者敬白

明治三十三年

設計書

本會は南亞宣教の準備として向ふ三ヶ年間を期し留學生男女七十名（男五十女二十）

を遷羅國盤谷府に派遣し同國の言語文學を練習せしめ以て後日宣教の資料を作るを初期の事業とし本年より實行する者とす第二期已降の繼續事業は目下之に苑つる財原を備へざるを以て敢て公言せずと雖若し幸に資財の出處を得る時は着々歩を進めて東は安南東京東蒲塞柴昆より北は老撾を該ね西は緬甸印度等の各地に宣教線を張り同じく留學生を派遣して言文の練習地理習俗の調査を爲さしむるものとす

初期留學生は遷羅國政府特別の保護を請ひ盤谷府公立學校に通學せしむる者とし夜間は本會設置の寄宿舍に於て本會規定の日本文學及漢籍の講習を常在監督者より受くるものとす

本會が派遣する留學生は日本内地の各孤兒院及慈善的育兒の團體中より男兒は十五歳未滿女兒十三歳未滿の俊秀を撰拔して之に充つる者とす

派遣留學男生中事故ありて五名を減ずるとする時は其其殘員四十五名を分て十三團とし一團三人を以て組織し内地十三ヶ所の樞區に分遣し殘員六名を留めて盤谷府

に置き内外連鎖及其他の事務に膺らしむ男女生七十名派遣向五ヶ年間繼續事業費設計如左

一金參萬參千圓也

但五ヶ年間繼續事業費(豫備金共總費額)

初年度　生徒　二十名　男十九　女五

金參千五百五拾六圓也

内譯

金四百貳拾圓	手當	監督	一名	一ヶ月　貳拾圓
		助手	一名	一ヶ月　拾五圓
同六百圓	但一名參拾圓	渡航費	男十五人　女五人	
同貳百圓	但一名十圓	渡航手當	男十五人　女五人	
同貳千百拾貳圓	但一名一ヶ月八圓宛	食料	監督助手男女生共二十二人	
同百貳拾六圓		臨時費		

二年度　生徒　四十名　右男十五女五新男十五女五

金五千參百八拾四圓也

內譯

金四百貳拾圓　手當　監督助手　一名一ケ月　貳拾圓　一名一ケ月　拾五圓

同六百圓　渡航費　男十五女五

同貳百圓　手當　男十五女五

同四千〇參拾貳圓　食料　監督助手男女生　四十二人

同百參拾貳圓　臨時費

三年度　生徒　七十名　右男三十女十新男二十女十

但本年末初年渡航生男十五女五卒業

金八千七百〇參圓也

內譯

金四百貳拾圓　手當　監督助手　一名一ケ月　貳拾圓　一名一ケ月　拾五圓

同九百圓　渡航費　男二十人女十人

同參百圓　渡航手當　男二十人女十人

同六千九百〇拾貳圓　食料（一ケ年間）監督助手男女生　七十二人

同百四拾壹圓　臨時費

四年度　生徒　五十五名　男四十女十五

但本年末二年度渡航生男十五女五卒業本年初二度生十五人在寺

金六千〇貳拾八圓五拾錢也

內譯

金四百貳拾圓　手當　監督助手　一名一ケ月　貳拾圓　一名一ケ月　拾五圓

同五千四百七拾貳圓　食料　監督助手男女生　五十七人

同五百五拾六圓五拾錢　臨時費

五年度　生徒三十名　男二十　女十

但本年末三年度渡航生男二十女十卒業二年度生男十五在寺

金參千六百貳拾壹圓也

內譯

金四百貳拾圓　手當　監督　一名一ヶ月　貳拾圓　助手　一名一ヶ月　拾五圓

同參千〇七拾貳圓　食料　監督助手　男女生　三十二人

同百貳拾九圓　臨時費

計　貳萬七千百六拾貳圓五拾錢

豫備金　五千八百參拾七圓五拾錢

合計　參萬參千圓

佛骨奉迎始末畢

明治三十三年七月十七日印刷
明治三十三年七月廿一日發行
（正價金拾五錢）

著作權

著作兼發行者　岩本千綱
高知縣高知市南新町三丁目十七番地
東京麴町區上六番町三十五番地

印刷者　須磨勘兵衛
京都市五條通高倉西入萬壽寺町十番戶

印刷所　佛教圖書出版株式會社
京都市油小路通松原上ル鞭町十二番戶

五年度　生徒三十名　男二十　女十

但本年末三年度渡航生男二十女十卒業二年度生男十五在寺

金參千六百貳拾壹圓也

內譯

手當	監督	一名一ヶ月	貳拾圓
	助手	一名一ヶ月	拾五圓
食料	監督助手男女生	三十二人	
臨時費			

金四百貳拾圓

同參千〇七拾貳圓

同百貳拾九圓

計　貳萬七千百六拾貳圓五拾錢

豫備金　五千八百參拾七圓五拾錢

合計　參萬參千圓

佛骨奉迎始末　畢

明治三十三年七月十七日印刷
明治三十三年七月廿一日發行　（正價金拾五錢）

著作權

著作兼發行者　高知縣高知市南新町三丁目十七番地　岩本千綱

印刷者　京都市五條通高倉西入萬壽寺町十番戸　須磨勘兵衛

印刷所　京都市油小路通松原上ル醒町十二番戸　佛教圖書出版株式會社

八朶道人著

日遲通商私史　一名曉の鐘

日遲交通の基原は遠く元龜天正の往古にありと雖も近時日遲公通の基原は果して何れに在るか曉鐘庵中に志士飢に泣き盤谷市中庸僧の殘飯に腹を充たし猶ほ且つ櫻花鄉男兒の淸操を全ふして遂に日遲兩國條約の締結を催せし前後の顚末に至ては鬼神爲に哭し嬌婦爲めに起つの槪あり

佛骨奉迎の擧其擧實に美なり而して此美事を紹介せしは實に帝國公使其人なりと雖も抑も亦た曉鐘庵裡の餘氣之を至さしめずんばあらず今や外交に敎法に益々日遲二者を接近せしめんとするの氣運に際して此私史の出づる豈に偶然ならとせんや世の志士仁人たるもの正に該著によりて曉鐘庵裡の志士が日遲交通に貢獻せるものゝ果して一字一涙不可再讀底の實蹟を見よ

○佛陀御遺形奉迎紀念出版廣告

玄藏　中尾祖應師
義達　上島探玄師　謹集

佛陀の聖典

洋裝總クロース金文字入
紙數凡五百ページ
定價金五拾錢
郵稅金八錢

一　來七月二十二日發行
一　特別價は本年十月迄に購入の諸君に對する割引價なり
一　各地書舖にして取次申込の相談に應ず

世界三大宗敎の中に於て最も優强なる勢力を有しその敎理は廣大且幽遠にして印度の南端より極東なる我日本帝國に至るまで殆んどその信徒を以て充されその信徒の數實に五億を以て數へられ且近來歐米の天地に迄布敎せられつゝあるものは佛敎ならずや此時に當り敎祖大聖釋迦牟尼佛陀の御遺形は印度に於て發見せられ**遲羅國**

皇帝陛下の御紹介によりて我大日本帝國に來化せられんとす

本書の編集者中尾祖應師上島探玄師は豫て佛陀の經典の廣大にして（五千四拾餘卷）

一切經を卷數にして經、律、論共に」信者は元より布教師すら充分拜讀せざる向あるは誠に遺憾の至りなれば是非共各經典より樞要の何を編集して何人も容易に了解し得るやうなさんものとて日夜是れが編集に從事せられしに佛陀の加護やありけん日頃小乘部は脫稿の運びに至れり右は即ち佛陀の聖典上編にして章を分つと四百全文振假名付且つ四六版なれば行住坐臥之れを携ふるに最も便利なり

日本帝國に在住する佛教信徒は何んたる幸福ぞや受け難き人身を受け遇ひ難き佛陀の御來化に逢ひ奉り聞き難き聖教なる聖典は漸く假名文字を讀み得んものは容易に了解し得べきやう編集せられたる「佛陀の聖典」は出たり

已に佛教を信ずるものは元より未だ佛教を信せざるものも如何に佛教の敎理の幽遠且廣大なるかを知らんとするものは必ず一本を購ひ給へ尚引續中編(方等、般若)下編(華嚴、法華、涅槃)の編集に從事せらるゝことなれば不遠江湖に紹介せんとす

京都市下京區油小路通松原上ル

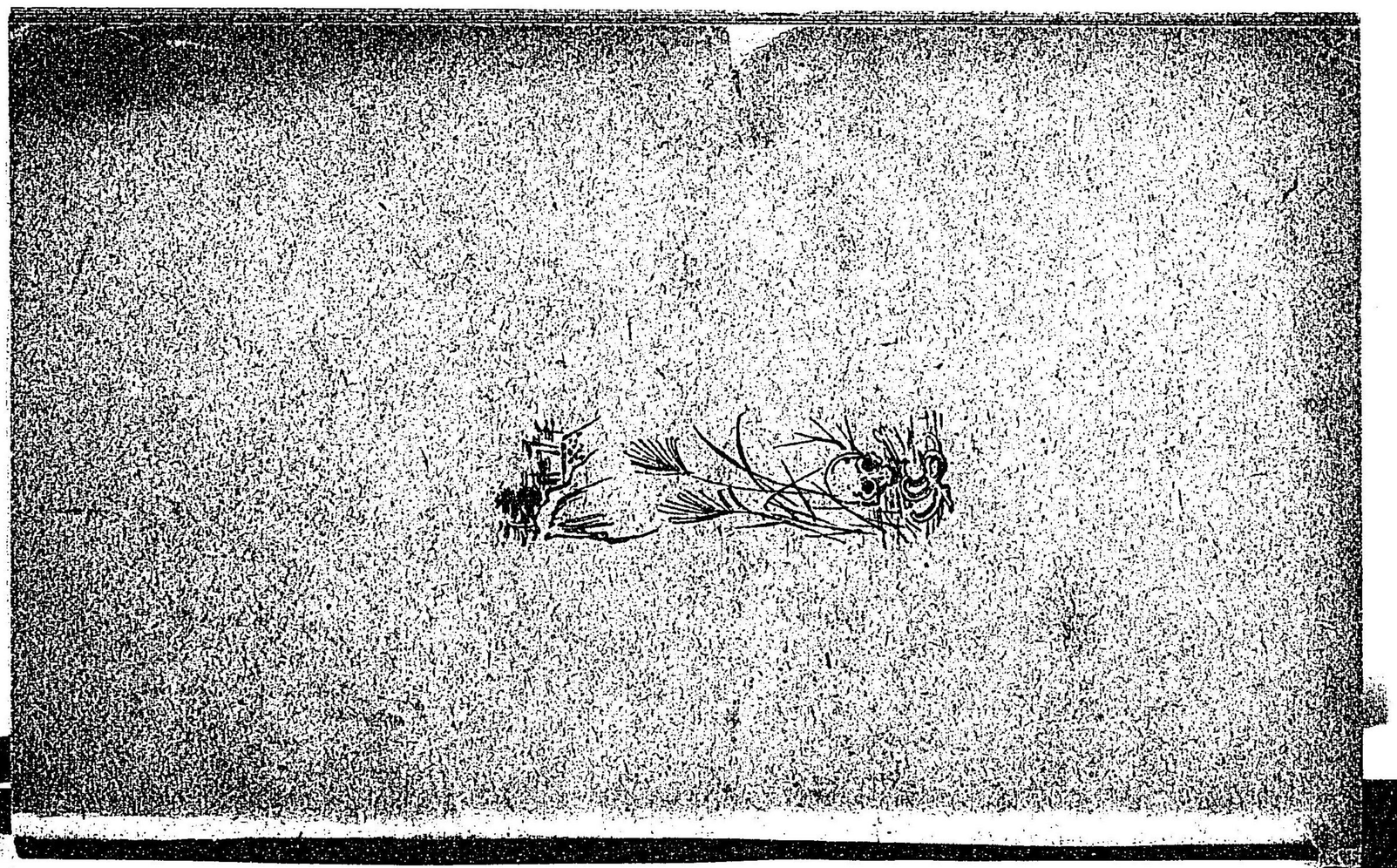
發行所 佛教圖書出版株式會社

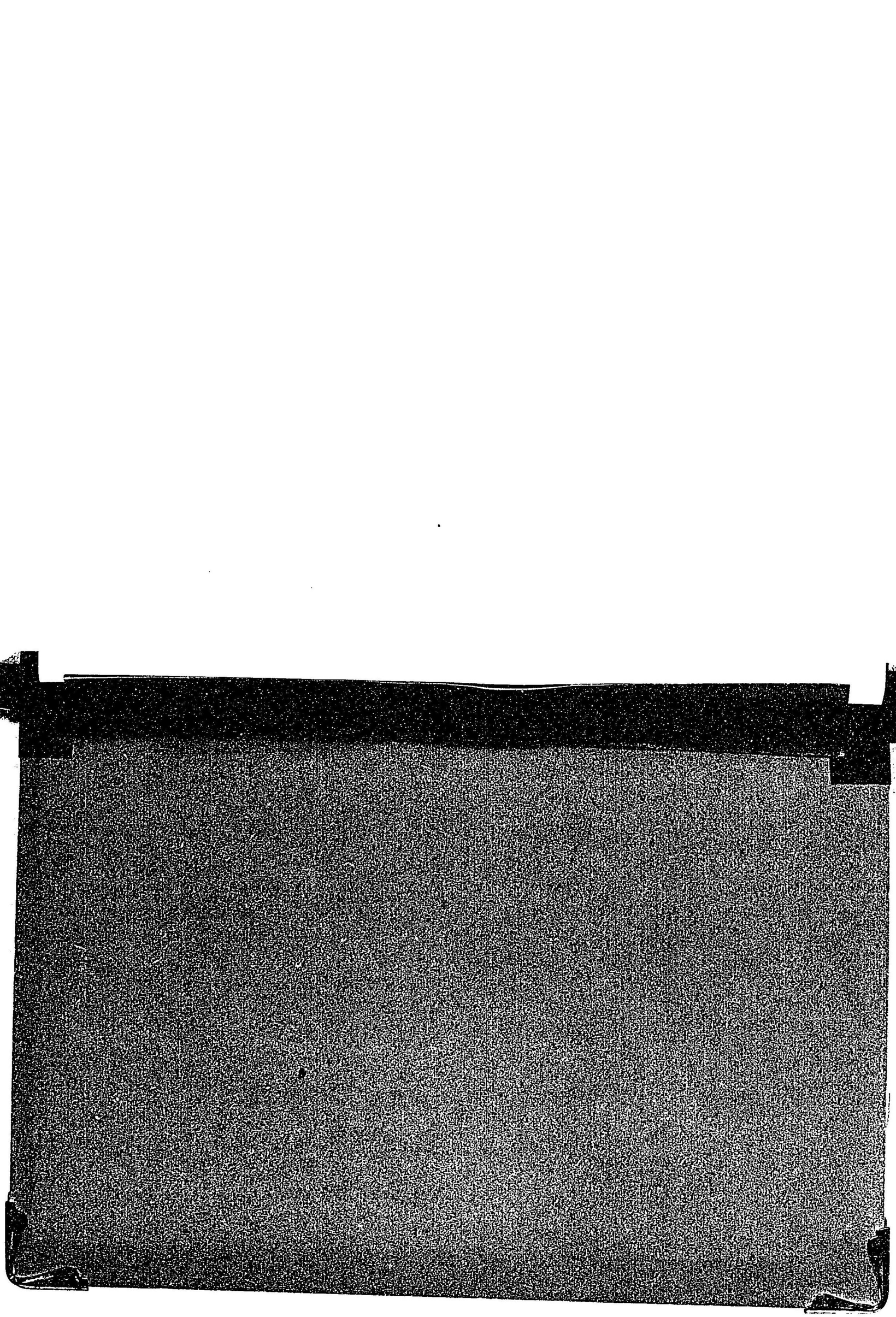
京都市下京區東六條中珠數屋町

賣捌所 法藏館

昭和十七年四月廿日

小牧實敬





180.21
I.912b

仏骨奉迎始末

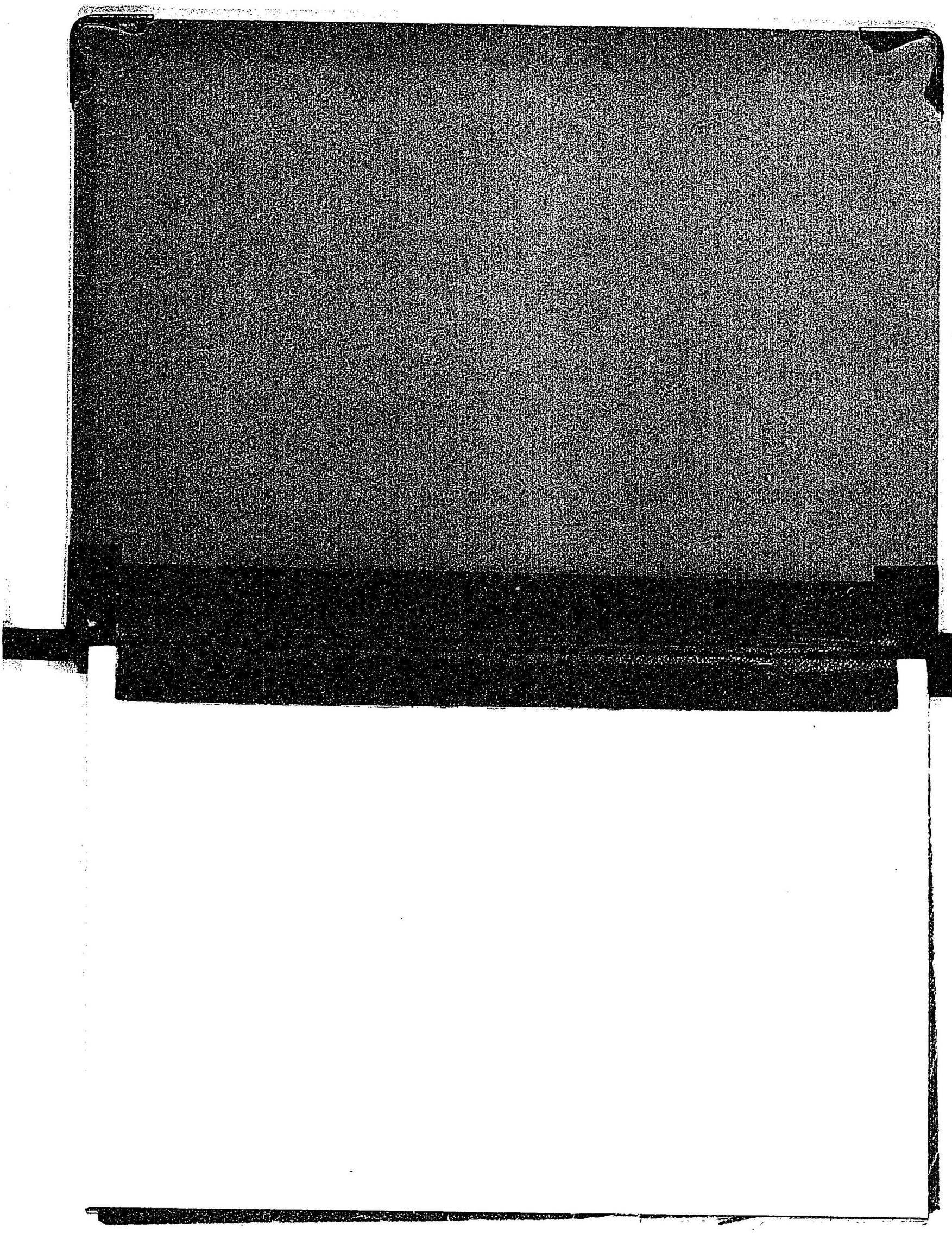
国立国会図書館

016094-000-3

180. 21-I912b

仏骨奉迎始末

岩本　千綱／著

M33. 7

ABC-1944